はじめに

本講座は、**国公立大二次試験**の最近の過去問を扱っています。国公立の二次試験は、問題数や選択肢問題が私大と比べて少なく、**記述中心**で構成されます。**「現代語訳」**の問題はほとんどの大学で出題されており、あとは、**理由・心情・内容などの説明問題**も頻出です。これらを全十二回で取り組んでいきましょう。

一部の私大のように傍線部のみで解ける問題はほぼなく、本文全体を踏まえた上での解答を求める大学も多いので、**全文の主旨**を把握できなければいけません。

和歌の解釈も頻出で、一番狙われる修辞技法はやはりアレですね（きっとわかった人もいるかとは思いますが、「は？何？」って思った人も講義中にちゃんと説明しますので安心してくださいネ）。

あとは、「作品常識」として特に知っておくべき**「日記」**を第七講で紹介しています。

そして、入試頻出の**『源氏物語』**。こちらはある程度「人物関係」を知っているほうが確実に有利です。もちろんみなさんが受験する大学の全てで『源氏物語』が出題されるかどうかのお約束なんてできませんが、万一、出題された時に人物関係をわかっていないと、読解する上でかなり難しい文章もあるのは事実です。市販でマンガ化されていますので、たとえば、受験勉強の休憩のつもりでそれらのマンガを読むのも一つの方法です。が、せっかくこの講座を受講してくれたのだから、この講座内で一応完結できるように、第八講で補足として主な登場人物の人物関係図と、五四帖分のあらすじを載せましたので、是非利用してください。

なお、この講座を受講するには、基本的な単語や文法、古文常識、読解ルールなどはわかっていることを前提とします。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

予復習・授業の受け方について

全ての講において、動画を見る前に該当講の予習をしてください。もちろん、本文をノートに写すとか不要です。このテキストに直接書き込んでかまいません。辞書を使わずに自力で解ききってください。

記述問題が多いので、最初は何を書いていいかわからず白紙にしてしまう人が多いのですが、**「自分で書く」ということをしないと記述力は養えません。**間違ってもかまいません。拙い日本語だろうがそんなことは気にしなくていいです。さらに、最初は時間制限なんて気にせず、どれだけかかったってかまいません。「とにかく自力で何かは書く」を、最初は目指してください。

予習が終われば、なるべく時間をあけずに該当講の動画を見てください。時間が経ってしまうと、せっかく予習をしたのに、どんな話だったか、どうしてその解答にしたのか忘れてしまうので、覚えている間に見ることが重要です。

あらかじめ板書している本文に、書き込みをしながら授業を進めていきます。私が黒板に書くことを、みなさんもテキストの本文に同じように（色は何色でも、一色でもかまいません）どんどん書き込んでください。先に自分で本文中に必要な印や記号がどんどん付けられる人は、自分が予習の段階で書いたものと、私が書いているものが同じかどうかという目線で動画を見るようにしてください。

講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。みなさんのレベルだと、おそらく文法事項や単語は身についていると思いますので、特に記述問題の復習がメインになるはずです。自分が予習の時に書いた解答と、模範解答を見比べて、何が不足していたのか、どこがおかしかったのかをしっかり確認してください。そして、例えば、意味は同じようなことだけど、自分が書いたものよりも良い言い回しがあれば、その言葉を自分の中にストックしていくのです。そうしていくと、より模範解答に近い解答が書けるようになっていきます。ちなみに「復習問題」は構成上、選択肢問題ということなので記述の問題が入れられず、よって、主に単語の意味や文法事項の確認になってしまいますが、「念のための確認」として使ってください。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

目次

第一講　『宇治物語』……p.4
第二講　『玉勝間』……p.9
第三講　『吾妻鏡』……p.16
第四講　『古今著聞集』……p.22
第五講　『平家物語』……p.29
第六講　『とはずがたり』……p.36
第七講　『讃岐典侍日記』……p.43
第八講　『源氏物語』〈幻〉……p.53
第九講　『源氏物語』〈宿木〉……p.72
第十講　『苔の衣』……p.78
第十一講　『今鏡』……p.88
第十二講　『保元物語』……p.95

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講『宇治物語』

次の文章は、若い少将が、父大納言には隠したまま、いとこの姫君と関係を結んでいたところ、関白（おとど）から大納言に、別の申し出があるという場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

その頃、関白殿、この少将を婿（むこ）がねにと月ごろ心ざし給ひ、内裏（うち）参りのついでに参り給ひて、いにしへ今の物語など聞こえ給うて、「かかること申し出づるはかたはらいたきことながら、(1)姫のあやしきをものし侍れど、いまださるべきよすがなくて、心苦しくなむ覚え侍る。少将の、生ひ先たのもしげなる人にてあめるを、あづけ聞こえて、(2)心やすく世をも思ひ離ればやとなむ思ふ」とのたまはす[a]。大納言、いとかたじけなく、よろこびかしこまりて、「これに過ぎたる面目（めいぼく）やさぶらふべき。ただとく仰せに従ふべきなり」と、うけひき申し給ふ。おとどはかかること聞こえ定めつるを心やすく思して、夜ふけぬれば帰り給ふ。

明くれば、大納言、少将を御招きありて、「おとど、ただ一人かしづかる[b]らむ姫のいはけなきを、いと捨てがたく、そこに譲りてむとのたまひつるほどに、いなび申しがたく、「かしこまり侍る」と申せしなり。よき日して、御消息など

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(3)ほのめかし給へ」と聞こえ給へば、少将とみに物も言は[c]れ給はず。さしうつむきて胸つとふたがり、(4)いかさまにしてこのこと思しとまるわざもがな、と人知れず嘆かれ給ひつつ、わづらはしくて立ち給ひ、その夜はうち臥して明かし給ひ、さまざま思し乱る。姫の、何心もなくておはするに、このことかくと聞き給はば、いかに思すらむ、さすがにあさはかにもあらぬ心ばへ、ありさまのほど思ふに、いとど心苦しくて、「心地いとなやまし」とて臥してのみおはし給ふ。

大納言より御使ひありて、「はやはや御消息ものし給へ。心に入らぬこととても、聞き過ぐしてやむべきならず」とのたまふものから、そむきがたければ御文奉れ給ふ。

　　逢ふまでのその行く末はまだ知らず思ひそむるぞ契りなりける

と書い給うて、人召して奉らせ給ふ。

（『宇治物語』による）

注
○婿がね――婿候補。
○姫の、何心もなくておはする――少将がひそかに関係を結んでいる姫君を指す。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線（1）を、「ものし」の意味を明らかにしつつ現代語訳せよ。

問二　傍線（2）を、適切に言葉を補いつつ現代語訳せよ。

問三　傍線（3）の「ほのめかす」とは、どういう「消息」を書くことが期待されているのか。説明せよ。

問四　傍線（4）を現代語訳せよ。

問五　二重傍線ａ～ｃについて、文法的に説明せよ。

a＝

b＝

c＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　復習問題

①「これゆゑそむくべきうき世なりけり」の解釈として、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　こういうことがあるから世の中はよくならないのだ。
イ　これをきっかけに世の中をよくしていこう。
ウ　これをきっかけに出家してしまおう。
エ　こういうことがあっても恋はあきらめない。

②「はぎ取らばや」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　はぎ取ってやろう　　イ　はぎ取りたいものだ
ウ　はぎ取れるだろうか　　エ　はぎ取れるはずがない

③「かしづき給ふことかぎりなし」の解釈として、最も適切なものを次の中から選べ。

ア　心配事が尽きることがない　　イ　繰り返し褒め言葉をかけている
ウ　限りなく呆れ果てている　　エ　いつも困惑しつつ嘆いている
オ　奥ゆかしく並々でなく大切にしている

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の傍線部の文法上の意味は何か。後の中から最も適当なものを選べ。

佐理大弐（すけまさのだいに）、世の手書の上手。任はてて上（のぼ）られけるに、伊予国の前（まへ）なる泊（と）まりにて、…

ア　自発　　イ　受身　　ウ　可能　　エ　尊敬

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講『玉勝間』

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

世々の物知り人、また今の世に学問する人などもみな、住みかは、里とほくしづかなる山林（やまはやし）を、住みよく好ましくするさまにのみ言ふ（ア）なるを、われはいか（イ）なるにか、さらにさはおぼえず、ただ人しげくにぎはしき所の、好ましくて、さる世ばなれたる所などは、さびしくて、心もしをるるやうにぞおぼゆる。さるは①まれまれにものして、一夜旅寝したるなどこそは、めづらかなるかたに、をかしくもおぼゆれ、さる所に、つねに住ままほしくは、さらにおぼえずなむ。人の心はさまざまなれば、人うとくしづかならむ所を、住みよくおぼえむもさることにて、まことにさ思はむ人も、世には多かりぬべけれど、また例の作りごとの、（a）漢ぶりの人まねに、さ言ひなして、なべての世の人の心と、ことなるさまに、もてなすたぐひも、中にはありぬべくや。Aかく疑はるるも、おのが俗情（さとびごころ）のならひにこそ。

のりなが、享和の初めの年、京にのぼりてありしほど、宿れりし所は、四条の大路の南づらの、烏丸のひむがし（ウ）なる所にぞありけるを、家はやや奥まりてなむありければ、物のけはひうとかりけれど、朝のほど夕暮れなどには、門に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

立ち出でつつ見るに、道も広くはればれしきに、ゆきかふ人しげく、いとにぎはしきは、②ゐなかに住みなれたる目うつし、こよなくて、目さむるここちなむしける。京といへど、なべてはかくてしもあらぬを、この四条の大路などは、ことににぎはしくなむありける。天の下三ところの大都（おおさと）の中に、江戸大坂は、③あまり人のゆきき多く、らうがはしきを、よきほどのにぎはひにて、よろづの社々寺々など、(b)古へのよしある多く、思ひなし尊く、すべて物きよらに、よろづの事みやびたるなど、B天の下に、住ままほしき里は、さはいへど京をおきて、外にはなかりけり。

（『玉勝間』による）

問一　傍線部①～③を現代語訳せよ。

①＝

②＝

③＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　二重傍線部（ア）～（ウ）について、文法的な説明として合致するものを、次の選択肢の中から一つずつ選べ。

a　動詞の一部
b　断定の助動詞
c　形容動詞の一部
d　存在の助動詞
e　伝聞推定の助動詞

（ア）＝
（イ）＝
（ウ）＝

問三　傍線部（a）・（b）の読みを答えよ。

（a）＝
（b）＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　波線部Ａ「かく疑はるる」とは、何についてどのように疑っているのか、詳しく説明せよ。

問五　波線部Ｂのように「のりなが」が述べる理由を、簡潔に説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　『玉勝間』の作者である「のりなが」の姓名を漢字で記せ。また、次の選択肢の中から、「のりなが」の著作でない、も、の、を一つ選べ。

a　古事記伝
b　万葉代匠記
c　古今集遠鏡
d　うひ山ぶみ
e　源氏物語玉の小櫛

姓名＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　復習問題

①「若君、姫君とぞ聞こゆなる。」の傍線部の助動詞の意味として正しいものを、次の中から選べ。

ア　現在の推量　　イ　過去の推量　　ウ　適当　　エ　可能
オ　断定　　カ　伝聞推定　　キ　完了　　ク　当然

②「中ならん物はさながら取れ」の傍線部と同じ意味で用いられているものとして、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり。（『古今和歌集』）
イ　この西なる家はなに人の住むぞ、問ひ聞きたりや。（『源氏物語』）
ウ　三条の宮に、親族（しぞく）なる人の衛門の命婦とてさぶらひけるたづねて文やりたれば、（『更級日記』）
エ　それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。（『竹取物語』）
オ　都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり（『土佐日記』）
カ　物思へば雲居に見ゆる雁（かりがね）の耳に近くも聞こゆなるかな（『和泉式部集』）

③「らうがはしく」の語句の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　騒々しく　　イ　うら悲しく　　ウ　不安げで
エ　生きた心地もなく　　オ　もがき苦しんで

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　本居宣長の著でないものを次の中から選べ。

ア　『古事記伝』
イ　『紫文要領』
ウ　『うひ山ぶみ』
エ　『万葉代匠記』
オ　『源氏物語玉の小櫛』

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講『吾妻鏡』

次の文章は、近世に成立した平仮名本『吾妻鏡』の一節である。源平の合戦の後、源頼朝《よりとも》（二位殿）は、異母弟の義経《よしつね》（九郎殿）に謀反の疑いを掛け、討伐の命を出す。義経は、郎党や愛妾《あいしょう》の静《しずか》御前を引き連れて各地を転々としたが、静とは大和国吉野で別れる。その後、静は捕らえられ、鎌倉に送られる。義経の行方も分からないまま、文治二年（一一八六）四月八日、鎌倉・鶴岡八幡宮《つるがおかはちまんぐう》に参詣した頼朝とその妻・北条政子（御台所《みだいどころ》）は、歌舞の名手であった静に神前で舞を披露するよう求める。静は再三固辞したが、遂に扇を手に取って舞い始める。以下を読んで、後の設問に答えよ。

静《しづか》、まづ歌を吟じていはく、

　吉野山みねのしら雪踏み分けて入りにし人の跡ぞこひしき

また別に曲を歌うて後、和歌を吟ず。その歌に、

　しづやしづしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

かやうに歌ひしかば、社壇《しやだん》も鳴り動くばかりに、<u>上下いづれも</u>（ア）興をもよほしけるところに、二位殿のたまふは、「今、八幡の宝前にて我が芸をいたすに、もつとも関東の万歳《ばんぜい》を祝《いは》ふべきに、人の聞きをもはばからず、反逆《ほんぎやく》の義経を慕《した》ひ、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

別の曲を歌ふ事、はなはだもつて奇怪(きくわい)なり」とて、イ御気色(きしよく)かはらせ給(たま)へば、御台所はきこしめし、「あまりに御怒(いか)りをうつさせ給ふな。我が身において思ひあたる事あり。君すでに流人とならせ給ひて、伊豆の国におはしましころ、われらと御ちぎりあさからずといへども、平家繁昌(はんじやう)の折ふしなれば、父(ちち)北条殿も、さすが時をおそれ給ひて、ウひそかにこれを、とどめ給ふ。しかれどもなほ君に心をかよはして、エくらき夜すがら降る雨をだにいとはず、かかぐる裳裾(もすそ)も露ばかりの隙(ひま)より、君のおはします御閨(ねや)のうちにしのび入り候(さぶら)ひしが、その後君は石橋山の戦場におもむかせ給ふ時、ひとり伊豆の山にのこりゐて、オ御命いかがあらんことを思ひくらせば、日になに程か、夜にいく度(たび)か、たましひを消し候ひし。そのなげきにくらべ候へば、今の静が心もさぞあるらむと思はれ、いたはしく候ふ。かれもし多年(たねん)九郎殿に相(あひ)なれしよしみをわすれ候ふ程ならば、カ貞女のこころざしにてあるべからず。今の静が歌の体(てい)、外には露ばかりの思ひをよせて、内には霧ふかき憤(いきどほ)りをふくむ。もつとも御あはれみありて、まげて御賞翫(しやうくわん)候へ」と、のたまへば、二位殿きこしめされ、ともに御涙(なみだ)をもよほしたる有様にて、キ御腹立(ふくりふ)をやめられける。しばらくして、簾中(れんちう)より卯の花がさねの御衣を静にこそは下されけれ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔注〕

○吉野山〜――「み吉野の山のしら雪踏み分けて入りにし人のおとづれもせぬ」（古今和歌集）を本歌とする。

○しづやしづ〜――「いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな」（伊勢物語）を本歌とする。「しづ（倭文）」は古代の織物の一種で、ここでは静の名を掛ける。「をだまき（苧環）」は、紡いだ麻糸を中を空洞にして玉状に巻いたもの。

○社壇――神を祭ってある建物。社殿。

○怒りをうつす――怒りの感情を顔に出す。

○流人――平治の乱の後、頼朝の父義朝（よしとも）は処刑、頼朝は十四歳で伊豆国に配流された。

○石橋山――神奈川県小田原市。治承四年（一一八〇）の石橋山の合戦の地。頼朝は平家方に大敗する。

○伊豆の山――静岡県熱海市の伊豆山（いずさん）神社。流人であった頼朝と政子の逢瀬の場。

○卯の花がさね――襲（かさね）の色目の名。表は白で、裏は青。初夏（四月）に着用する。

問一　傍線部ア・エ・オを現代語訳せよ。

ア＝

エ＝

オ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　「御気色かはらせ給へば」（傍線部イ）とあるが、なぜそうなったのか、説明せよ。

問三　「ひそかにこれを、とどめ給ふ」（傍線部ウ）とあるが、具体的には何をとどめたのか、説明せよ。

問四　「貞女のこころざし」（傍線部カ）とは、ここではどのような心のさまをいうのか、説明せよ。

問五　「御腹立をやめられける」（傍線部キ）とあるが、政子の話のどのような所に心が動かされたのか、説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　復習問題

①「上下となく立ちこみて」の口語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　入口であろうと出口であろうと、お構いなしに押し合って。
イ　人の体を踏みつけてしまいそうなほど混乱して。
ウ　誰彼とも知らない人々が一か所に集中して。
エ　身分の相違もお構いなしに押し合いへしあいしながら。

②「気色悪しければ」の語句の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　機嫌が悪いので
イ　薄気味悪いので
ウ　悪い兆しがあったので
エ　情趣が感じられないので

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文を読んで後の**問**に答えよ。

この女心得たりけるにや、〈中略〉蔵人をまねきよせて、うちわらひて「『[a]くれ竹の』と申させ給へ。…」〈中略〉このこと奏し申せば、「さだめて古歌の句にてぞはべらん」とて御尋ねありけるに、その庭には知りたる人なかりければ、為家卿のもとへ御尋ねありけるに、とりあへず、ふるき歌とて、

[b]たかくともなににかはせむくれ竹のひと夜ふたよのあだのふしをば

問　次の解説文は、波線部ａ「くれ竹の」と、波線部ｂの和歌について述べたものである。空欄［A］〜［C］に入れる語句として最も適切なものを、ア〜オのうちからそれぞれ一つずつ選べ。

波線部ｂの和歌にある「くれ竹」は、天皇の居殿の庭に植えられていたことから、高貴な身分にある天皇を表す。「よ」は竹の節のことで、「ふし」とともに「くれ竹」の［A］である。また、「よ」は竹の節の意味と同時に同音の「夜」の意味をも持つ。この技法を［B］という。この歌の趣意は、相手がたとえ高貴な方であっても、その場限りの実のない逢瀬（おうせ）を頼みとすることはできません、というもの。波線部ａの「くれ竹の」は、女が波線部ｂの和歌を［C］として用い、天皇に自分の思いを伝えたのである。

ア　掛詞　　イ　縁語　　ウ　枕詞　　エ　引歌　　オ　本歌取り

A＝　　　B＝　　　C＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講『古今著聞集』

次の文章は、「院」の側の秦久清と「大将」の側の下毛野敦文による競馬（くらべうま）の説話です。よく読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合で省略した個所があります。

建仁三年十二月二十日、北野宮寺に御幸ありて、競馬十番ありけるに、五番めに、左、院の右の番長（ばんぢやう）秦久清、右に大将、下毛野敦文、番（つが）はせられにけり。久清は上手なり。敦文は不堪（ふかん）の者なりければ、久清合手（あひて）を嫌ひて辞し申しけれども、かなはざりければ、心地あしく覚えながら、番ふべきになりたりけるに、さても ア なかなか不堪の仁に負けなば、なほ本意なかるべしと思ひけり。

かくて久清、北野の宿所にて出で立つほどに、僧一人来りて「申すべきことあり」と言ひけれども、競馬の乗尻（のりじり）は、その日はことに物忌みをして法師などには会はぬことにて、下人ども聞き入れざりけり。この僧 イ あながちに言ひければ、久清に告げてけり。久清、①様（やう）こそあるらめと思ひて、出であひて尋ねければ、僧が言ふやう、「過ぎぬる夜の夢に、この馬場にて、賀茂の神人（じにん）とおぼしくて、馬場末に横さまに縄を引きて、勝負の鉾（ほこ）などをさばくりつるを、②夢の心地に怪

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しみ尋ぬれば、『院の右の先生（せんじやう）の勝負の料なり』と言ふと思ひて覚めぬ。賀茂の大明神の御計らひにて、勝たせ給ふべし」と告げければ、久清、幼くより賀茂につかうまつるものなれば、嬉しく頼もしく覚えて、「勝ちて後、悦（よろこ）びは申すべし」と言ひて返してけり。

その期になりて、久清・敦文打ちつがひて、敦文前に立ちたりけるが、少し[ウ]しどけなく見えけるを、久清かたきをあなづりて遠ながら追ひてけり。敦文が馬よく出で合ひて早く勝ちにけるほどに、鞭さして勝負の鉾のもとにて安堵して見返りたりけるに、久清追ひ着きて、敦文が頸（くび）かみに手をかけたりければ、敦文落ちて久清勝ちにけり。[A]勝ちながらあまりに不思議にて、久清丈尺にて打ちて見ければ、鉾、例よりも一丈あまり遠く立ちたりけり。かの僧が夢も思ひあはせられて、大明神の御計らひ、かたじけなく覚えけり。[B]例の寸法にて立ちたらましかば、早く負けなまし。不思議なりけることなり。この僧には、悦び言ひたりけるとかや。敦文ほどの不堪のものに、これほどの勝負し出だしたりとて、[C]勝ちながら御気色悪しかりけるとなむ。まして負けなましかば、定めてよかるまじきに、神明の御計らひ、かたじけなかりけり。

（『古今著聞集』より）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（注）

競馬…左右二方より一騎ずつ組み合わせて競走させる行事。一方を先に走らせ、他方が追う形をとる。決められた区間内では、相手の馬や騎手（乗尻）への妨害が認められており、落馬させるか先着すれば勝ちとなる。なお、馬は競技用ではないので乗りこなしに技術を要した。
不堪…技術がつたない。
右の番長…御所を警護する武人の役職名。
勝負の鉾などをさばくりつる…終点の目印などを手際よく用意している。
右の先生…御所を警護する武人の役職名。ここでは秦久清のこと。
悦び…お礼。
頸かみ…狩衣などで、首のまわりを囲むようにした襟（えり）。
丈尺…長さ一丈（約三メートル）のものさし。

問一　傍線部ア～ウの意味を記しなさい。

ア＝

イ＝

ウ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　波線部①②の現代語訳を記しなさい。

①＝

②＝

問三　傍線部Aについて、どのような点が「不思議」なのですか、具体的に記しなさい。

問四　傍線部Bについて、次の問いに答えなさい。

ａ　「ましか」の文法的な説明を記しなさい。活用のある場合は、品詞、終止形、問題文中での活用形名、意味の順に記しなさい。

ｂ　傍線部全体の現代語訳を記しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　傍線部Ｃについて、次の問いに答えなさい。

ａ　主語を明記して、現代語訳しなさい。

ｂ　「勝ちながら御気色悪しかりける」となったのはなぜですか。簡潔に説明しなさい。

問六　問題文の出典である『古今著聞集』と同じ鎌倉時代成立の作品を、次の中から二つ選びなさい。

ア　古今和歌集　　イ　新古今和歌集　　ウ　拾遺和歌集
エ　今昔物語集　　オ　源氏物語　　カ　風姿花伝
キ　太平記　　ク　方丈記　　ケ　枕草子
コ　土佐日記

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　復習問題

①「なかなか」の解釈として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　いつまでたっても　　イ　かえって
ウ　すばらしく　　エ　少しずつ

②「あながちに」の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　いつの間にか　　イ　思いがけず　　ウ　かろうじて
エ　無理をして　　オ　もっともらしく

③「しどけなくて」の意味として、最適なものを次の中から選べ。

ア　いいかげんでしまりがなくて　　イ　堅苦しく近寄りがたくて
ウ　あどけなくかわいらしくて　　エ　やわらかく親しみやすくて

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　「思ふ心侍らずは、まかり逃げ侍りなまし。」の傍線部の助動詞の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　適当　　　イ　伝聞　　　ウ　完了

エ　反実仮想　オ　推定　　　カ　打消

⑤　次の作品のうちで鎌倉時代に成立した作品はどれか。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　『新古今和歌集』　イ　『古今和歌集』　ウ　『草枕』

エ　『万葉集』　　　　オ　『心中天網島』

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講 『平家物語』

次の文章は、『平家物語』の一節である。三位中将（さんみのちゅうじょう）、平重衡（たいらのしげひら）は、源氏との戦いに敗れ、捕えられて都に移送された。重衡に仕える木工右馬允知時（もくうまのじょうともとき）という武士が、捕われの身となった重衡のもとを訪れた。文章を読んで、問一〜六に答えなさい。

三位中将の年ごろ召しつかはれける侍（さぶらひ）に、木工右馬允知時といふ者あり。八条の女院（にようゐん）に候（さぶら）ひけるが、土肥次郎（とひのじらう）がもとにゆきむかつて、「是（これ）は、中将殿に先年召しつかはれ候ひし某（それがし）と申す者にて候ふが、西国へも御供仕（つか）まつるべき由存じ候ひしかども、八条の女院に兼参（けんざん）の者にて候ふ間（あひだ）、力及ばでまかりとどまつて候ふが、今日大路で見まゐらせ候へば、目も当てられず、いとほしう思ひ奉り候ふ。しかるべう候はば、御許されを蒙（かうむ）つて、近づき参り候ひて、今一度見参（げんざん）に入（い）り、昔語りをも申して、なぐさめまゐらせばやと存じ候ふ。させる弓矢とる身で候はねば、いくさ合戦の御供を仕まつりたる事も候はず。ただ朝夕伺候（しこう）せしばかりで候ひき。さりながら、なほおぼつかなう思しめし候はば、腰の刀を召し置かれて、まげて御許されを蒙り候はばや」と申せば、土肥次郎なさけある男（をのこ）にて、「①<u>御一人ばかりは何事か候ふべき</u>。さりながらも」とて、腰の刀をこひとつて入れてんげり。右馬允なのめならず喜んで、急ぎ参つて見奉れば、まことに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

思ひ入れ給へるとおぼしくて、御姿もいたくしをれかへつて居給へる御有様を見奉るに、知時涙もさらにおさへ難し。三位中将も是を御覧じて、夢に夢見る心地して、とかうの事ものたまはず。ただ泣くより外(ほか)の事ぞなき。やや久しうあつて、昔今の物語どもしたまひて後、「さても②なんぢして物言ひし人は、いまだ内裏にとや聞く」。「さこそ承り候へ」。「西国へ下りし時、文をもやらず、言ひおく事だになかりしを、世々のちぎりはみな偽(いつはり)にてありけりと思ふらんこそ(A)はづかしけれ。文をやらばやと思ふは。尋ねて行きてんや」とのたまへば、「御文を賜(たま)はつて参り候はん」と申す。中将なのめならず喜んで、やがて書いてぞたうだりける。守護の武士ども、「いかなる御文にて候ふやらん。いだしまゐらせじ」と申す。中将「見せよ」とのたまへば、見せてんげり。「くるしう候ふまじ」とて(a)とらせけり。

知時もつて内裏へ参りたりけれども、昼は人目のしげければ、その辺(へん)近き小屋に立ち入つて、日を待ち暮らし、局(つぼね)の下口(しもぐち)辺にたたずんで聞けば、この人の声とおぼしくて、「いくらもある人のなかに、三位中将しも生け取りにせられて、大路をわたさ(b)るる事よ。人はみな奈良を焼きたる罪のむくいと言ひあへり。中将もさぞ言ひし。『わが心におこつては焼かねども、悪党おほかりしかば、手々(てんで)に火を放つておほくの堂塔を焼きはらふ。末(すゑ)のつゆ、本(もと)のしづくとなるなれば、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

われ一人が罪にこそならんずらめ』と言ひしか。(B)げにさとおぼゆる」とかきくどき、さめざめとぞ泣か(c)れける。右馬允、③是にも思はれけるものをといとほしう覚えて、「もの申さう」と言へば、「いづくより」と問ひ給ふ。「三位中将殿より御文の候ふ」と申せば、年ごろは恥ぢて見えたまはぬ女房の、せめての思ひのあまりにや、「いづらや、いづら」とてはしり出でて、手づから文をとつて見給へば、西国よりとられてありしありさま、今日明日とも知らぬ身のゆくゑなんど、こまごまと書きつづけ、奥には一首の歌ぞ有りける。

(C)涙河うき名を流す身なりともいま一たびのあふせともがな

女房これを見給ひて、とかうの事ものたまはず、文をふところに引き入れて、ただ泣くより外の事ぞなき。

〔注〕
○三位中将――平重衡（一一五七〜一一八五）の官職。
○木工右馬允知時――「木工右馬允」は知時の官職。
○八条の女院――鳥羽天皇皇女、暲子（しょうし）内親王（一一三七〜一二一一）。
○兼参――三位中将と八条女院の両方に仕えていること。
○たうだりける――「たびたりける」の音便形。
○奈良を焼きたる罪――治承四年（一一八〇）、平重衡らが敵対する奈良の東大寺、興福寺などを焼き討ちにした事件。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

○悪党――暴徒化したやから。

問一　傍線部①、②、③を現代語訳しなさい。

①＝

②＝

③＝

問二　二重傍線部（a）は、誰が何を「とらせ」たのか、答えなさい。

が　　　　を

問三　二重傍線部（b）、（c）を、例にならって文法的に説明しなさい。

例　召しつかはれ候ひし‖　→　過去の助動詞の連体形

（b）＝

（c）＝

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部（A）は、誰のどのような気持ちか、状況をふまえて具体的に説明しなさい。

問五　傍線部（B）を、「さ」が指す内容を明らかにして、現代語訳しなさい。

問六　傍線部（C）の歌に込められた三位中将の心情を、五〇字以内で説明しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　復習問題

①　「いとほしがりて」の説明として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　敦行を気の毒に思ったということ
イ　親子が互いにいたわりあう姿に打たれたということ
ウ　競技が台無しになったのを残念がったということ

②　「何事かあらむ」の意味の説明として、最適なものを次の中から選べ。

ア　反実仮想で、「もしもそんなことをしたなら、大変なことになってしまう」という意味である。
イ　反語で、「何か不都合なことがあろうか、いや、ない」という意味である。
ウ　推量で、「必ずや重大な外交問題に発展するだろう」という意味である。

③　「やがて」の意味として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　すぐに　イ　そして　ウ　ややあって　エ　知らぬうちに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「この者どもに養はれて行きけるほどに…」の傍線部の文法上の意味は何か。最も適当なものを次の中から選べ。

ア　受身　　イ　可能　　ウ　完了
エ　尊敬　　オ　自発

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講『とはずがたり』

次の文章は『とはずがたり』の一節である。後深草院とその母である大宮院が嵯峨の離宮に前斎宮を招待し、後深草院に仕える作者二条も同席することになった場面である。後深草院は前斎宮を見て心を動かされる。読んで問いに答えよ。

大宮院、顕紋紗の薄墨の御衣、鈍色の御衣引き掛けさせたまひて、同じ色の小几帳立てられたり。斎宮、紅梅の三御衣に青き御単衣ぞ、なかなか(ア)むつかしかりし。御傍親とてさぶらひたまふ女房、紫の匂ひ五つにて、物の具などもなし。

斎宮は二十に余りたまふ。(1)ねびととのひたる御さま、神もなごりを慕ひたまひけるもことわりに、花といはば、桜に喩へても、よそ目はいかがと誤たれ、霞の袖を重ぬる隙もいかにせましと思ひぬべき御有様なれば、まして隈なき御心の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にかと、よそも御心苦しくぞおぼえさせたまひし。

御物語ありて、神路の山の御物語など、絶え絶え聞こえたまひて、「今宵はいたう更けはべりぬ。のどかに、明日は嵐の山の禿なる梢どもも御覧じて、御帰りあれ」など申させたまひて、(イ)わが御方へ入らせたまひて、いつしか、「いかがすべき、いかがすべき」と仰せあり。思ひつることよと、をかしくてあれば、「幼くより参りし験に、このこと申

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ」など仰せありて、やがて御使(つかひ)に参る。ただ大方(おほかた)なるやうに、「御対面うれしく、御旅寝(たびね)(2)すさまじくや」などにて、忍びつつ文(ふみ)あり。氷襲(こほりがさね)の薄様(うすやう)にや。

知られじな今しも見つる面影(おもかげ)のやがて心にかかりけりとは

更けぬれば、御前(まへ)なる人もみな寄(よ)り臥(ふ)したる。御主(ぬし)も小几帳引き寄せて、御殿籠(とのごも)りたるなりけり。近く参りて、事のやう奏(そう)すれば、御顔うち赤めて、いと物ものたまはず、文も見るとしもなくて、うち置きたまひぬ。「何とか申すべき」と申せば、「思ひよらぬ御言(こと)の葉(は)は、何と申すべき方(かた)もなくて」とばかりにて、また寝たまひぬるも(ウ)心やましければ、帰り参りて、このよしを申す。

「ただ、寝たまふらむ所へ導け、導け」と責めさせたまふもむつかしければ、御供(とも)に参らむことはやすくこそ、しるべして参る。甘(かん)の御衣などは(3)ことごとしければ、御大口(おほくち)ばかりにて、忍びつつ入らせたまふ。

まづ先(さき)に参りて、御障子(しやうじ)をやをら開(あ)けたれば、ありつるままにて御殿籠りたる。御前(まへ)なる人も寝入りぬるにや、音する人もなく、小(ちひ)さらかに這(は)ひ入らせたまひぬる後(のち)、いかなる御事どもかありけむ。うち捨てまゐらすべきならねば、御

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

上臥（うへぶし）したる人のそばに寝（ぬ）れば、今ぞおどろきて、「こは誰（た）そ」と言ふ。「御人少（ひとずく）ななるも御いたはしくて、御宿直（とのゐ）しはべり」と答（いら）へば、まことと思ひて物語するも、用意なきことやとわびしければ、「眠（ねぶ）たしや。更けはべりぬ」と言ひて、空眠（そらねぶ）りして居（ゐ）たれば、御几帳（みきちやう）の内も遠からぬに、いたく御心も尽くさず、はやうち解けたまひにけりとおぼゆるぞ、（エ）<u>あまりに念（ねん）なかりし</u>。心強くて明かしたまはば、いかにおもしろからむとおぼえしに、明け過ぎぬ先に帰り入らせたまひて、「桜は匂ひはうつくしけれども、枝もろく、折りやすき花にてある」など仰せありしぞ、さればよとおぼえはべりし。

（『とはずがたり』による）

（注）

○顕紋紗――平織りで種々の文様を織りだした薄い絹。
○斎宮――伊勢神宮に仕える未婚の内親王。ここでは後嵯峨院皇女愷子内親王のこと。このときすでに斎宮を退いている。
○傍親――おそばづきの縁者。
○神路の山――伊勢神宮の南方にある山。
○禿なる梢――落葉して裸になった梢。
○氷襲――白い和紙を二枚重ねたもの。
○大口――大口袴の略。束帯の時、表袴の下にはく袴。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線の箇所（1）（2）（3）の語句の意味を記せ。

（1）＝

（2）＝

（3）＝

問二　傍線の箇所（ア）「むつかしかりし」は何に対するどのような感情を表したものか。二十字以内で説明せよ。

問三　傍線の箇所（イ）「わが御方へ入らせたまひて、いつしか、『いかがすべき、いかがすべき』と仰せあり」を口語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線の箇所（ウ）「心やましければ」とあるが、作者にそのような印象を覚えさせたのは、斎宮のふるまいのどのような所か。五十字以内で説明せよ。

問五　傍線の箇所（エ）「あまりに念なかりし」とあるが、作者がそのように思ったのはなぜか。その理由について四十字以内で説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　復習問題

①「まめやかに聞こえたまへば」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　やさしげにたしなめなさるので
イ　真剣に説得なさるので
ウ　優美に申し上げなさるので
エ　意地悪に申し付けなさるので

②「ことごとしく」の意味は何か。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　荒々しく　　イ　大げさに　　ウ　確かに
エ　準備おこたりなく　　オ　大声で

③「やをらに」の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　すばやく　　イ　そっと　　ウ　突然
エ　不作法に　　オ　わずかに

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の文章を読んで、傍線部の語句の意味として最も適当なものを、後の中から選べ。

輔親、「とく夜の明けよかし」と待ち明かして、いつしか起きて、寝殿の南面をとりしつらひて、営みゐたり。

ア　いつのまにか　　イ　いつものように　　ウ　たびたび
エ　早くから　　オ　遅くに

⑤　次の文章を読んで、傍線部の現代語訳として最も適当なものを、後の中から選べ（文章の一部省略）。

姫君の御夢に、唐絵の様したる人、琵琶を持て来て、「〈中略〉」とて、失せぬと見給ひて、おどろき給へれば、暁がたになりにけり。

ア　胸騒ぎがなさったので
イ　意外にお思いになって
ウ　お目覚めになると
エ　ため息をついていらっしゃると
オ　びっくりなさっていらっしゃると

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　『讃岐典侍日記』

次の文章は、かつて堀河天皇（在位一〇八六〜一一〇七）に出仕していた筆者が、亡き堀河天皇をしのびつつ、六歳の鳥羽天皇に仕えている場面である。これを読んで、問いに答えよ。

あまりなるまでかしづかせたまひし御ことは、思ひ出でらるるに、御前（おまへ）におはしまして、「われ抱（いだ）きて、障子（さうじ）の絵見せよ」とおほせらるれば、（ア）よろづさむる心地すれど、朝餉（あさがれひ）の御障子（みさうじ）の絵、御覧ぜさせ歩くに、夜の御殿（おとど）の壁に、明け暮れ目なれておぼえむとおぼしたりし楽（がく）を書きて、押しつけさせたまへりし笛の譜の、押されたる跡の、壁にあるを見つけたるぞ、あはれなる。

笛の音（ね）の押されし壁の跡見れば過ぎにしことは夢とおぼゆる

かなしくて袖を顔に押しあつるを、（イ）あやしげに御覧ずれば、心得（こころえ）させまゐらせじとて、さりげなくもてなしつつ、「あくびをせられて、かく目に涙の浮きたる」と申せば、「みな知りてさぶらふ」とおほせらるるに、あはれにもかたじけなくもおぼえさせたまへば、「いかに知らせたまへるぞ」と申せば、「ほもじのりもじのこと、思ひ出でたる（ウ）なめり」とお

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ほせらるるは、堀河院の御こととよく心得させたまへると思ふも、うつくしうて、あはれもさめぬる心地してぞ笑まるる。

（『讃岐典侍日記』による。）

（注）
かしづかせたまひし御こと――堀河天皇が筆者を寵愛（ちょうあい）なさっていたこと。
朝餉――天皇が朝食をとる部屋。
夜の御殿――天皇の寝所。
楽――楽譜。
押しつけ――（楽譜を壁に）貼りつけ。
押されたる跡――貼りつけてあった楽譜をはがした痕跡。
笛の音――笛の楽譜。
ほもじのりもじのこと――「ほ文字」と「り文字」で「堀」。堀河天皇のことを遠回しに表す。
堀河院――堀河天皇。鳥羽天皇の父。

問一　傍線部ア「よろづさむる心地すれど」について、何から「さむる心地」がしたのかを明らかにして口語訳せよ。

問二　傍線部イ「あやしげに御覧ずれば」を、主語を明らかにして口語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問三　傍線部ウ「なめり」を文法的に説明せよ。

問四　傍線部エ「笑まるる」について、その理由をわかりやすく説明せよ。

問五　この文章の出典は『讃岐典侍日記』である。この作品よりも後に成立した日記を次の中から一つ選べ。

a　十六夜日記
b　和泉式部日記
c　蜻蛉日記
d　更級日記
e　土佐日記

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【補足】（講義動画中に使用します）

『**土佐日記**』

作者…**紀貫之**

成立…平安前期

内容…土佐守の任期を終えた貫之が、**土佐から帰京するまで**の五十五日間を、**女性に仮託**して仮名文で書いた船旅日記。
京都から娘も一緒に土佐へ連れて行ったが、土佐で病気のため亡くなる。**亡くなった娘への哀惜**と、天候不順等でなかなか船が進まず帰れないなど、**帰京への切実な願い**などが書かれている。

特徴…**最初の仮名日記（女性仮託）**。
軽妙・簡潔な文章。

冒頭文…**「男もすなる日記（にき）といふものを、女もしてみむとてするなり。」**

ポイント…**「女子・恋ふる人・昔へ人・いにしへ人・亡き児・見し人・小松**（比喩）**・白玉**（比喩）**」**＝**亡くなった娘**

『**蜻蛉（かげろふ）日記**』

作者…**藤原道綱母（みちつなのはは）**

成立…平安中期

内容…**夫藤原兼家（かねいえ）**との**結婚生活の不満**を吐露（兼家は**物忌みなどを口実**にして通ってこず浮気をしている）。
一夫多妻時代の**女性の苦悩**。作者は苦悩のあまり出家まで考える。兼家との**一人息子の道綱が生きがい**。

ポイント…**「幼き人・ただ一人ある人」**＝**道綱**

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

『和泉式部日記』

作者…和泉式部**（←有名な歌人）**

成立…平安中期

内容…恋人の**為尊**（ためたか）**親王（故宮）**と死別。悲しみにくれている作者を**為尊親王の弟敦道**（あつみち）**親王（帥宮**（そちのみや）**）**が慰め、**恋愛へと発展**していく過程が書かれている。**贈答歌が多**い。**「多情女」**と敦道の乳母などから批判もされている。作者は自分のことを作品中では**「女」**と**三人称**を用いて書いている。

ポイント…主語把握は**敬語**が使える！**〈地の文〉**

> **尊敬語有＝敦道親王（帥宮）**
> **尊敬語無＝作者（和泉式部・女）**
> **謙譲語有＝作者→敦道親王へ**
> が多い。

『紫式部日記』

作者…紫式部**（←一条天皇の中宮彰子に仕えた女房）**

成立…平安中期

内容…「前半」宮中での行事や中宮彰子の出産など**宮廷生活の記録**。

「後半」同僚の女房**（和泉式部・赤染衛門）**や、**清少納言の人物批評**。**憂愁に満ちた自己の内面**を吐露。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

『更級日記』

作者…**菅原孝標女**（←母方の**伯母が藤原道綱母**）

成立…平安中期

内容…国司の娘として東国の果てで育つが、十三歳のとき、父の任国**上総から上京**するときから、夫と死別した晩年までの**回想日記**。少女時代、上京する際の紀行文、都での生活、仏教の進行などが書かれている。**作者は少女時代、物語の世界に夢中**になり、特に**『源氏物語』**に憧れていた。後年は、物詣に夢中になり仏教を頼る。

冒頭文…**「あづまぢの道のはてよりも、猶おくつかたに生ひいでたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ…」**

ポイント…冒頭文の出だし**「あづまぢ〜生ひいでたる人」**＝**作者自身**のこと

『讃岐典侍日記』

作者＝藤原長子

成立…平安後期

内容…「上巻」**堀河天皇の発病から崩御**までが書かれている。熱心に看病をするが天皇は崩御し、作者は嘆き悲しみ天皇を追憶する。

「下巻」堀河天皇の父である**白河院から、幼帝鳥羽天皇への再出仕命令**が下る。最初は渋々参内し、**宮中生活の中で何かにつけて堀河天皇を偲ぶ**が、徐々に鳥羽天皇をいとしく感じていくようになる。

ポイント…**時制に気を付ける**こと。**堀河天皇が元気な場面は、回想場面。二重尊敬＋「過去」**の主語は**堀河天皇**が多い。**二重尊敬のみ**で**「いはけなし」**などの単語で表現されていれば**鳥羽天皇**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

『十六夜（いざよひ）日記』

作者…**阿仏尼（←『うたたね』の作者）**

成立…鎌倉中期

内容…夫藤原為家の死後、先妻の子と我が子との間に**領地相続争い**がおき、その**訴訟のため、京都から鎌倉へ下った紀行文**。子を思う母親の愛情が溢れている。

★日記成立順

〈平安前期〉土佐日記↓

〈平安中期〉蜻蛉日記↓和泉式部日記↓紫式部日記↓更級日記↓

〈平安後期〉讃岐典侍日記↓

〈鎌倉中期〉十六夜日記

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　復習問題

①「あはれとおぼしめしたりけるなめり」の傍線部の文法的意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　当然　イ　伝聞　ウ　完了　エ　回想
オ　詠嘆　カ　断定　キ　婉曲　ク　反実仮想

②　次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。読んで後の**問**に答えよ。

「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。

問　傍線部は誰の言葉か。正しいものを次の中から選べ。

ア　作者の子供　イ　堀河院　ウ　鳥羽天皇　エ　人々

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。読んで後の**問**に答えよ。

御帳（みちやう）の帷（かたびら）見るにも、まづ、[A]おほせられしことども、[B]思ひ出（い）でらる。昔をしのぶいづれの時にか露かわく時あらんとおぼえて、かたしきの袖（そで）もぬれまさり、枕（まくら）のしたに釣（つ）りしつばかり、よろづのことに目のみ立ちて、たがふことなくおぼゆるに、ただひと所の姿の見えさせたまはぬと思ふぞ、かなしき。御前（おまへ）の臥（ふ）させたまひたる御かたを見れば、[C]いはけなげにて大殿（おほとの）ごもりたるぞ、変はらせおはしまししとおぼゆる。…〈以下略〉

問１　傍線部Ａ〜Ｃの主語を次の中から選べ。

ア　堀河天皇　　イ　鳥羽天皇　　ウ　作者

Ａ＝　　　　Ｂ＝　　　　Ｃ＝

問２　二重傍線部「ひと所」とは誰のことか。**問１**の選択肢の中から選べ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④『讃岐典侍日記』は天仁二（一一〇九）年頃に成立したとされるが、それ以後に成立した日記を次の中から一つ選べ。

ア　土佐日記　　イ　紫式部日記　　ウ　十六夜日記　　エ　更級日記　　オ　蜻蛉日記

⑤以下は『更級日記』に関する説明である。（ａ）から（ｃ）に入る適当なものを後の中から選べ。

『更級日記』の作者（ａ）は『蜻蛉日記』の作者（ｂ）の姪（めい）にあたる人物である。『更級日記』においては（ｃ）が書いた『源氏物語』に対する憧（あこが）れの思いが繰り返し綴（つづ）られている。

ア　和泉式部　　イ　紫式部　　ウ　清少納言　　エ　藤原俊成女
オ　菅原孝標女　　カ　藤原道綱母　　キ　赤染衛門

ａ＝　　ｂ＝　　ｃ＝

⑥文学作品の成立順として正しいものを、次の中から選べ。

ア　『蜻蛉日記』―『土佐日記』―『十六夜日記』―『更級日記』
イ　『土佐日記』―『蜻蛉日記』―『更級日記』―『十六夜日記』
ウ　『更級日記』―『土佐日記』―『十六夜日記』―『蜻蛉日記』
エ　『土佐日記』―『更級日記』―『蜻蛉日記』―『十六夜日記』

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講『源氏物語』〈幻〉

次の文章は『源氏物語』の一節であり、光源氏が最愛の女性であった紫の上を亡くしてから一年が経過したところから始まっている。読んで、後の問に答えよ。

今年をばかくて忍び過ぐし<u>つれ</u>[A]ば、今はと世を去りたまふべきほど近く思しまうくるに、あはれなること尽きせず。やうやう①<u>さるべきことども</u>、御心の中に思し続けて、さぶらふ人々にも、ほどほどにつけて物賜ひなど、おどろおどろしく今なん限りとしなしたまはねど、近くさぶらふ人々は、御本意（ほい）遂げたまふべき気色（けしき）と見たてまつるままに、年の暮れゆくも心細く悲しきこと限りなし。

落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども、「破（や）れば惜（を）し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、※かの須磨のころほひ、ア<u>ところどころより奉りたまひける</u>もある中に、かの御手なるは、ことに結（ゆ）ひあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、※久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年（ちとせ）の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、か

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ひなくて、疎（うと）からぬ人々二三人ばかり、御前にて破らせたまふ。

いと、かからぬほどのことにてだに、（イ）過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを、ましていとどかきくらし、それとも見分かれぬまで降りおつる御涙の水茎（みづくき）に流れそふを、人もあまり心弱しと見たてまつるべきがかたはらいたうはしたなければ、②おしやりたまひて、

死出（しで）の山越えにし人をしたふとて③跡を見つつもなほまどふかな

（『源氏物語』による）

（注）

かの須磨のころほひ—源氏が都を離れ、須磨・明石に蟄居（ちっきょ）していたころ、の意。

久しうなりにける世—源氏が須磨・明石より帰京したのは、二十年以上前のことである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部Aの「つれ」と同じ助動詞が用いられている箇所を、直前の動詞とともに本文中から抜き出し、それぞれ助動詞の活用形の名称を答えよ。

助動詞を含む箇所	活用形
過ぐしつれ	

問二　傍線部①「さるべきことども」とあるが、どのようなことを指すのか、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部ア、イを現代語訳せよ。

ア＝

イ＝

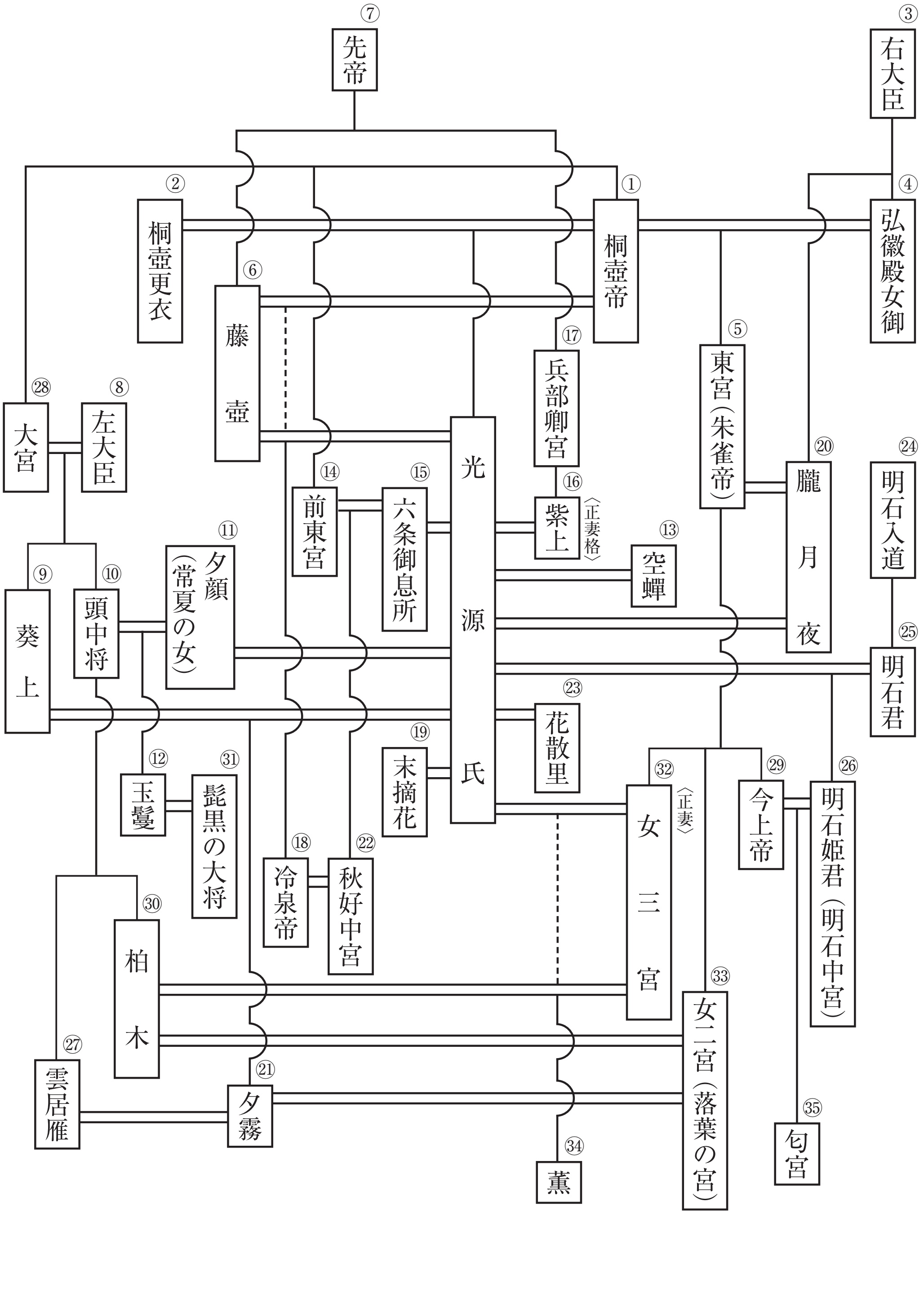
© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部②について、源氏がこのような行動に出た理由を説明せよ。

問五　傍線部③について、「跡」と同じものを指していると思われる言葉を、第二段落の中から二つ抜き出して答えよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【補足】〈『源氏物語』人物関係図⑴〉



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

『源氏物語』　あらすじ

〈1帖「桐壺」～41帖「幻」〉

①桐壺帝（きりつぼてい）〔源氏の父〕は②桐壺更衣（きりつぼのこうい）を寵愛するが、桐壺更衣の父大納言は既に亡くなっており、たいして高貴な身分でもないために、桐壺帝のもとへ一番に入内した③右大臣の娘である④弘徽殿女御（こきでんのにょうご）をはじめとして、様々な女御たちから桐壺更衣は猛烈ないじめを受ける。しかし、桐壺帝の寵愛はさらに深くなり、桐壺更衣は「玉の男皇子（をのこみこ）」を生む。これが光源氏である。桐壺帝の源氏への愛情は格別であった。桐壺帝と弘徽殿女御との間にも先に男の子が生まれており（第一皇子＝⑤東宮〔後の朱雀帝（すざくてい）〕）、その子が皇太子になると世間では思われているが、桐壺帝の源氏へのかわいがり方が並大抵ではないので、弘徽殿女御は「もしかしたら光源氏が皇太子になるのでは…」と疑い、さらに桐壺更衣をいじめたおす。桐壺更衣はそのいじめで心労が重なり、病気がちになって、源氏が三歳の頃に死んでしまう。桐壺帝はショックを受け過ぎて引き籠ってしまう。

それから四～五年が経ち、「桐壺更衣によく似ている女性がいる」と桐壺帝は聞きつけ、その女性の入内を申し入れる。その女性こそ、将来、源氏の永遠の憧れ人となる⑥藤壺（ふじつぼ）であった。藤壺は、噂通り桐壺更衣にとても似ており、悲しみに沈んでいた桐壺帝の心は自然と慰められていく。藤壺は、⑦先帝の四の宮であったため、身分もきちんとしており、桐壺帝から寵愛を受けても桐壺更衣のようにいじめられることはなかった。源氏は亡くなった母親〔＝桐壺更衣〕の容貌の記憶があまりなかったが、典侍（ないしのすけ）から「藤壺はお母さんに似ている」と聞かされたので、藤壺の中に母親の姿を感じて憧れる。藤壺も桐壺帝から「源氏の亡き母親とそっくりだから、この子〔＝源氏〕のことを疎まずかわいがってほしい」と言われており、まだ幼かった源氏の母親代わり（と言っても、年齢は実は源氏と五歳しか変わらない）として、かわいがる。

源氏は十二歳で元服し、⑧左大臣の娘の⑨葵上（あおいのうえ）（四歳年上）と政略結婚させられる。元服すると今までのように藤壺に会うことができなくなるので、源氏は寂しくて仕方がない。葵上は、自分は東宮妃になるものだと思っていたので、東宮でもない四歳も年下の源氏の妻になったことが耐えられない。そもそもこの結婚は帝と左大臣が勝手に決め、当人同士はその気がないことから、夫婦関係はうまくいかない。

源氏は葵上とは不仲ではあったが、その兄の⑩頭中将（とうのちゅうじょう）〔後の内大臣〕とは仲が良く、他二名を加え四人の男で「どのよ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

うな女性が良いか」という人物批評をしたりする（「雨夜の品定め」）。その中で源氏は「上流階級でプライドが高い女よりも、中流の女性の中に教養も兼ね備えた素晴らしい女性がいる」という話を聞く。そして、頭中将は「こっそり人知れず通っていた（中流の）女性がいて、女の子までもうけたが、自分の妻（③右大臣の娘四の君。人物関係図では省略）に脅されて姿を隠した。今はようやく忘れかけているが、その女性はきっとまだ自分のことを忘れられずにいるだろう」と話す。その女性が⑪常夏の女（＝夕顔）で、女の子が⑫玉鬘（たまかずら）である。

「雨夜の品定め」でいろんな女性の話を聞いた源氏は、人妻である⑬空蟬（うつせみ）（八歳年上）と一夜限りの関係を持つ。源氏は夢中になるが、空蟬は自分の身分や立場をわきまえて、源氏の誘いを拒み続ける。夜に忍び込んできた源氏に気づいた空蟬は、自分の単衣と義理の娘の軒端（のきば）の荻（おぎ）（人物関係図では省略）を残して部屋から退出。源氏はそのまま気づかず寄り添い、次第に人違いだと気づいたが、どうすることもできず軒端の荻と契りを結ぶ。最後いろいろありきたりな言葉を交わし、源氏は空蟬の単衣を取って出て行った。

その後源氏は、亡くなった⑭前東宮（さきのとうぐう）の妻である⑮六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）（七歳年上）のもとに通うようになる。源氏にとっては遊びの恋愛であるが、六条御息所は光源氏に本気で恋をしてしまう（これが後々大変なことになるのである）。

源氏の乳母が病気になり、源氏が乳母のところにお見舞いに訪れた時に、隣の家に住んでいた⑪夕顔（二歳年上）と出会う。夕顔からの手紙が素晴らしい筆跡と内容であったので、「身分が低いものが住む家かと思うようなところに、意外にも風流な女が見つけられたら嬉しい」と源氏は思い、「雨夜の品定め」でいろいろな階級の女性の話も聞いていた源氏は夕顔に興味を持ち、お互い素性を隠したまま恋に落ちる。ある日、源氏は夕顔と、夕顔の侍女の右近のみを連れ出して、夜二人きりで過ごし少し寝入った頃、源氏の枕元に女性が現れ「私のところには訪ねて来ないで、こんなたいしたこともない女を引き連れているなんて、つらくてたまらない」と言って、隣で寝ている夕顔をその女性が襲う夢を見て、源氏は目を覚ます。この女性が⑮六条御息所の生霊であり、とりつかれた夕顔はこのまま目を覚ますことなく死んでしまうのである。当然であるが、源氏は六条御息所のところへもなかなか足が向かなくなってしまう。

夕顔の死でショックを受けた源氏は病気になり、北山の僧のところに加持祈祷で出かけるが、その辺りを歩きまわっていて覗いた家に、とてもかわいく、あの藤壺にそっくりな女の子を見つける。それが⑯紫上（むらさきのうえ）（八歳年下）である。藤壺に似て

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いるのはたまたまではなく、実は紫上は、藤壺の実の兄である⑰兵部卿宮（ひょうぶきょうのみや）が愛人との間に作った女の子であり、藤壺の姪にあたる。紫上と一緒にいた尼君に、源氏は紫上との結婚を前提とした後見役を申し出るが断られる。が、この尼君が亡くなり、「父親の兵部卿宮に引き取られる」という噂を聞いた源氏は、先に強引に自分の住んでいる二条院に連れて来て、自分好みの女性に育てていき、後に理想通りの妻とするのである。

その間にも、病気のために里に下がっていた藤壺のもとを訪れた源氏は、自分の気持ちが抑えきれなくなり、実父の妻であり、自分の義母でもある藤壺の部屋に強引に入って迫り、関係をもってしまう。それがもとで、藤壺は妊娠。その子が後の⑱冷泉帝（れいぜいてい）である。もちろん出生の真実は言えないので、世間的には桐壺帝との子ということになっている。源氏は自分の犯した罪に苦しむが、藤壺もこのことに悩み苦しみ、その後、源氏のことを避け続けるのである。何も知らない桐壺帝は、生まれてきた冷泉帝を「源氏の幼いころにそっくりだ」と大喜びでかわいがり、藤壺はさらに罪悪感に苛まれる。

源氏は、他にも⑲末摘花（すえつむはな）（鼻が赤く、「源氏の相手」の女性の中で不器量として有名）とも関係を持つ。

藤壺に避けられ寂しい源氏は、③右大臣の六番目の娘である⑳朧月夜（おぼろづきよ）と出逢い恋に落ちる。最初お互い素性を隠すが、朧月夜は最初から源氏だと気づいていた（源氏は誰かわかっていない）。朧月夜は⑤東宮への入内が決まっていたが、朧月夜は政略結婚が嫌で、源氏との恋愛にのめり込んでいく。源氏もそのうち、相手が政治上敵方になる右大臣（源氏は⑧左大臣の娘の⑨葵上を正妻にしているので、左大臣側の人間である）の娘だと気づいたが、朧月夜と会うことをやめようとしない。さらに、入内した後も二人の恋愛は続いており、完全に不倫関係である。

桐壺帝が譲位し、⑤東宮は朱雀帝に、藤壺と源氏〔世間的には桐壺帝〕の子〔⑱冷泉帝〕が東宮となる。こんな中、不仲だったはずの正妻の葵上も妊娠。不仲ではあったが、はじめての妊娠で葵上も不安で、いつものようにプライド高くすましていることもできず、そんな姿が源氏にはかわいらしく思え、妊娠を機に二人の仲は良くなっていった。

賀茂祭の御禊（ごけい）の日、源氏が行列に参加することになるが、それをこっそり見に来ていた六条御息所の一行と、正妻の葵上の一行が場所争いをし（「車争い」）、先に来ていたのは六条御息所だが、「正妻」の立場の葵上には勝てず、場所をどかされただけでなく、乱暴によって牛車も破損され、たくさんの人の中で六条御息所は恥をかかされる。源氏は後で、その出来事を知り、六条御息所のもとへ謝罪に行くが会ってもらえない。さらに、六条御息所は、不仲だと聞いていた葵上の妊娠を知り、嫉妬の

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

あまりに、またもや自分の意志ではコンロトール不能となり、知らず知らずのうちに生霊となってしまうのである。葵上が出産で苦しんでおり加持祈祷をするが、源氏が看病している時に、葵上に乗り移った六条御息所の生霊が、源氏に自分のつらさを葵上の身体をかりて訴えかける。葵上はなんとか男の子㉑夕霧（ゆうぎり）を生むが、生霊に憑りつかれたため出産後葵上は急死。そして、正妻がいなくなった源氏は、⑯紫上と半ば強引に契りを結ぶのである。一方、六条御息所は無意識とは言え、自分の生霊が二人の女性を殺してしまったことを自覚しており、いたたまれなくなり、亡くなった前東宮との間の娘（後に冷泉帝の妻となる㉒秋好中宮（あきこのむちゅうぐう））が伊勢の斎宮と決まっていたので、娘と一緒に伊勢に下向することを決める。源氏はそれを知り、六条御息所を哀れに思い、六条御息所の元へ訪れ別れを惜しんだ。

　桐壺帝が亡くなり、藤壺は源氏を避けるためにも出家。藤壺への想いが完全に断たれてしまった源氏は、朧月夜との不倫で心を慰めていたが、これがとうとう右大臣一家にばれてしまう。桐壺帝が亡くなった今は、⑤朱雀帝の世で右大臣家が栄えている。政治上敵方の不倫の愛の代償は大きく、源氏はこのまま都にいることはできず、自ら須磨に退去することを申し出る。

　須磨に行くまでに、かつての恋人でもある㉓花散里（はなちるさと）の元へ行く。花散里は、たいして美しい女性ではなかったが、性格がとても良く、源氏が苦しい時にはいつも精神的に支えていた存在の女性であり、源氏もとても大切にしていた女性である。後に源氏と葵上の息子である㉑夕霧の母親役を務めるほど源氏に信用されていた。

　いよいよ源氏は、愛する紫上や藤壺たちに別れを告げ須磨へ行き、寂しい日々を過ごしていた。須磨では激しい嵐が続いていたが、ある夜、源氏の夢に桐壺帝が出てきて「神の導きに従い、須磨を離れるように」と告げる。その翌朝、㉔明石入道（あかしのにゅうどう）が船でやってきて、源氏は「これがお告げのことだ」と思い、明石へ行った。明石入道は、自分の娘である㉕明石君（あかしのきみ）をかねてより高貴な人の妻にしたいと思ってきたが、源氏をまたとない相手であると考え、源氏に娘との結婚を薦める。源氏はすぐに乗り気になるが、明石君は身分の違いを自覚しており、自分のような田舎の女はいつか捨てられるはずだと気が進まない。が、ついに源氏は明石君の部屋を訪れ、契りを結ぶ。想像以上に美しく教養も深い明石君に夢中になり、源氏は連日のように訪れ、京都の紫上に明石君との結婚の報告を手紙で伝える。紫上はさすがにショックを受け、源氏を非難するような返事を送る。源氏も紫上からの手紙で反省をし、明石君の元に通うのを少し控えるが、それはそれで明石君が「最初に考えていた通りだ」と内心ショックを受ける。が、たまに訪れる源氏には、そのような素振りは一切見せず普通に振舞い、そんな明石君のけなげな

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

様子が源氏にはさらに愛しく感じた。ついに明石君は源氏との子を妊娠する（その子が後に明石中宮（あかしのちゅうぐう）となる㉖明石姫君（あかしのひめぎみ））。

一方、都では③右大臣が亡くなり、④弘徽殿女御も病気になり、⑤朱雀帝も病気で目を患い、さらに、朱雀帝は夢の中で①桐壺帝から怒られ、源氏を都に呼び戻す決断を下す。源氏は妊娠中の明石君に「いつか必ず迎えに来る」と約束をし、明石に残したまま都に戻る。源氏が都に帰ると朱雀帝は譲位、藤壺と源氏〔世間的には桐壺帝〕との子が⑱冷泉帝として即位する。源氏は、冷泉帝の補佐役として内大臣に昇進する。こうして、左大臣派の世の中になる。

明石では、明石君が無事、明石姫君を出産。源氏は祝いの品を明石に送るが、子供がいない紫上は内心嫉妬する。

六条御息所と娘の斎宮〔＝㉒秋好中宮〕は、伊勢から都に戻って来ており、六条御息所は病気になる。源氏がお見舞いに訪れると、六条御息所は娘のことを源氏に託す。ただし、「娘には絶対に手を出さないように」とお願いをして亡くなった。源氏は遺言通り斎宮を養女として引き取り、冷泉帝に入内させることを決めた。入内するまでは紫上に斎宮の世話を託し、子供好きなのに子供がいなかった紫上は喜んで面倒を見る。そして後、斎宮は入内をし、梅壺の女御を経て秋好中宮となる。

花散里の元を訪れようとした源氏が、道中たまたま荒れ果てた家が目に入り、「見たことがある家だ」とよく考えれば、それは⑲末摘花の家であった。源氏が須磨へ行ってしまい、後見役を失った末摘花は、周りの女房たちにも見放され、伯母が「自分の娘の召使いにしよう」と九州に連れて行くことを企んだりもしたが、それでも源氏を信じて、どんなに貧乏になろうがずっとその場を離れず源氏を待ち続けたのである。今まで自分のことを完全に忘れていた源氏に恨み言を一つも言わず、十一年ぶりにやっと会えた喜びでいっぱいになる。そんな姿に源氏も感動し、最終的には末摘花を二条東院に引き取った。

源氏は明石君と明石姫君を都に迎えたいが、明石君はやはり身分の違いが不安でなかなか上洛できない。そこで明石入道が、源氏が建てた嵯峨野の御堂が近くにある大堰川近くの山荘に、明石君と明石姫君を住まわせることを決めた。源氏は紫上を気遣い、なかなか訪れることができないが、御堂に行くことを口実にやっと訪れ、三年ぶりに明石君と再会し、自分の娘である明石姫君と初めて対面する。源氏は「この娘の将来のためにも自分の手元に引き取りたい」と考え、紫上に「養女として明石姫君を育ててほしい」と相談をし、子供好きの紫上は喜んで引き受ける。が、明石君にとっては、娘との別れとなるので、娘の将来のためとはわかっているが、なかなか決断ができないでいた。が、やはり田舎ものの自分が育てるよりも都で源氏の手元で育ったほうが娘の将来のためだと考え、断腸の思いで決断を下す。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

藤壺が三十七歳で病気のため亡くなる。源氏は悲嘆にくれる。さらに冷泉帝は、ある僧から自分の出生の秘密を聞き、本当は源氏の子供だということを知る。冷泉帝は天皇の位を父親の源氏に譲ろうと考えたが、源氏は拒絶する。

源氏と葵上の息子㉑夕霧が、十二歳で元服。夕霧は⑩頭中将〔この頃は内大臣〕の娘の㉗雲居雁（くもいのかり）と幼馴染じみであり、恋仲であった。夕霧は、葵上の母親の㉘大宮に育てられており（後に二条東院で㉓花散里が夕霧の養母となる）、雲居雁も訳あって大宮に育てられていた。内大臣〔＝⑩頭中将〕は、娘の雲居雁を「東宮〔後の㉙今上帝〕の妃にしよう」と考えていたので、夕霧との仲を知り、怒って自分の邸に雲居雁を引き取ることを決める。が、二人は密かに手紙を交わし続ける。

この頃、源氏は六条に大邸宅の「六条院」を完成させ、四季の町に分け、春の町に紫上を、夏の町に花散里を、秋の町に里帰り用の邸として秋好中宮を、冬の町に明石君を住まわせた。そして、さらにこの頃、⑪夕顔の元侍女で今は源氏の元で仕えている右近が、夕顔の娘の⑫玉鬘と偶然再会し、右近は源氏にこのことを伝え、源氏は花散里を玉鬘の養育係として玉鬘を六条院に引き取る。玉鬘はとても美しい女性に育ち、内大臣〔＝⑩頭中将〕の息子の㉚柏木（よって実は玉鬘は柏木の実の姉にあたるのだが、柏木はそんなことは知らない）、源氏の弟の蛍宮（ほたるのみや）（人物関係図(2)の㊷）、㉛髭黒（ひげぐろ）の大将（たいしょう）などのたくさんの男性から求婚される。養女として引き取った源氏ですら、玉鬘の美しさに言い寄って添い寝をしてしまうほどであった。玉鬘はそんな源氏に困惑する。その頃、実父の内大臣〔＝⑩頭中将〕は夢占で「夕顔との間の娘が、養女として育てられている」と告げられ、行方を探す。

夏のある日台風が来て、その日たまたま六条院に来ていた夕霧は紫上を見てしまい、紫上の美しさに目を奪われ頭から離れなくなる。その翌日、源氏は夕霧を引き連れて女君たちのお見舞いに行く。玉鬘の元を訪れた際も、源氏と玉鬘のいる部屋を覗いてしまった夕霧は、玉鬘の美しさにまた目を奪われ、さらに親子であるはずの源氏が玉鬘に寄り添っているのを見て不審に思う。美しい女性たちに目を奪われながらも、雲居雁への気持ちは変わらず手紙を送り続ける。

玉鬘の裳着の儀式を行うことになり、源氏はその腰結いの役を実父の内大臣〔＝⑩頭中将〕に依頼する。理由がわからない内大臣は最初断るが、源氏から真実（玉鬘が自分と⑪常夏の女の娘だということ）を聞かされ、喜んで引き受ける。玉鬘は⑱冷泉帝への出仕が決まっていたが、その前に強引に㉛髭黒の大将が契りを交わす。最初、玉鬘は無骨な男性である髭黒の大将と深い仲になってしまったことが相当ショックで、なかなか打ち解けようとはしなかったが、大切に扱ってくれる髭黒の大将

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に次第に心を開いていく。ちなみに、髭黒の大将には前妻がいる〔人物関係図⑵の51〕がうまくいってなかった。

東宮〔＝後の㉙今上帝〕の元服が決まり、㉖明石姫君の入内も決まってしまったので、内大臣は㉗雲居雁の入内を諦め、夕霧との結婚をようやく認める。

紫上は明石姫君の後見役を、実母である明石君に譲り、明石君は大喜びである。ここで初めて紫上と明石君は対面し、お互いが素敵な女性であることを認めあう。

朱雀院〔＝源氏の兄にあたる⑤朱雀帝〕は、病気がよくならず出家を決意するが、後見役がいない㉜女三宮（おんなさんのみや）のことが気掛かりで、源氏に正妻として託すことを相談する。当時源氏は四十歳、女三宮は十四歳で二十六歳もの差があったが、兄からの頼みが断り切れず、承諾する。源氏は実際に女三宮と対面して、あまりの幼さに愕然とし、紫上に対する愛情を再確認したが、一方、それまで正妻格であった紫上にとっては、女三宮が「正妻」として源氏に嫁ぐことに不安を覚え、また、源氏に対しても不信感が募り、出家を望むようになる。が、源氏は紫上の出家を許さない。

㉚柏木は、女三宮との結婚を切望していたが、まだ若くて頼りないということで許してもらえず、源氏の妻となった後も未練を残していた。たまたま、女三宮の姿を垣間見た柏木は、さらに女三宮に夢中になる。

紫上が三十七歳の厄年の時、病気で倒れ、源氏は紫上につきっきりになる。紫上は死にかけるが、なんとか命を取り留める。その時に、また⑮六条御息所の死霊が現れ源氏を驚かせた。一方、柏木は、女三宮の姉の㉝女二宮（おんなにのみや）〔＝落葉の宮（おちばのみや）〕と結婚するが、女三宮が忘れられない。源氏が紫上につきっきりで、女三宮のところに訪れないことを聞いた柏木は、自分の気持ちを抑えられずに、女三宮の元へ通い契りを結んでしまう。さらに女三宮が柏木との子を妊娠してしまう（その子が㉞薫（かおる））。幼い女三宮は、柏木からの恋文をすぐ見つかるような夜具の下に隠しており、源氏は案の定すぐにその手紙を見つけて、父親が柏木であることを知る。自分も桐壺帝に同じことをしたが、自分の妻に手を出された源氏は、柏木が許せない。六条院で会った時に、柏木は源氏から思いっきり嫌味を言われ睨みつけられ、小心者の柏木は罪に恐れおののき病気になる。女三宮は無事、薫を出産したが、女三宮も罪の意識に苦しみ、実父で既に出家していた⑤朱雀院に出家を申し出る。源氏は引き留めたが、そのまま出家してしまう。それを聞いた柏木はショックを受ける。お見舞いに訪れた㉑夕霧に「妻の㉝落葉の宮のこと」と「源氏への謝罪」を遺言として残し、その後亡くなる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

夕霧は親友の遺言通り、落葉の宮の元を訪れ慰める。その帰り道に、落葉の宮の母親（人物関係図では省略）から柏木の形見である横笛をもらう。が、夢に柏木が現れ「その笛を伝えたい人は他にいる」と告げられる。後日、源氏の元を訪れた夕霧は薫を見て、柏木に似ていることを不審に思い、源氏に柏木の遺言と横笛の話を伝える。源氏は横笛を預かる。夕霧は、落葉の宮を慰めているうちに恋愛感情を抱くようになる（落葉の宮は拒み続けていた）。それに気づいた妻の㉗雲居雁と夕霧は大喧嘩をするが、落葉の宮に対する気持ちも捨てられず、結局、強引に落葉の宮と契りを結んでしまう。翌朝、雲居雁との邸に帰ってくると、雲居雁は幼い子供たちの数人を連れて実家（⑩内大臣〔頭中将〕の邸）に戻っていた。夕霧は連れ戻しに行くが取り合ってもらえない。

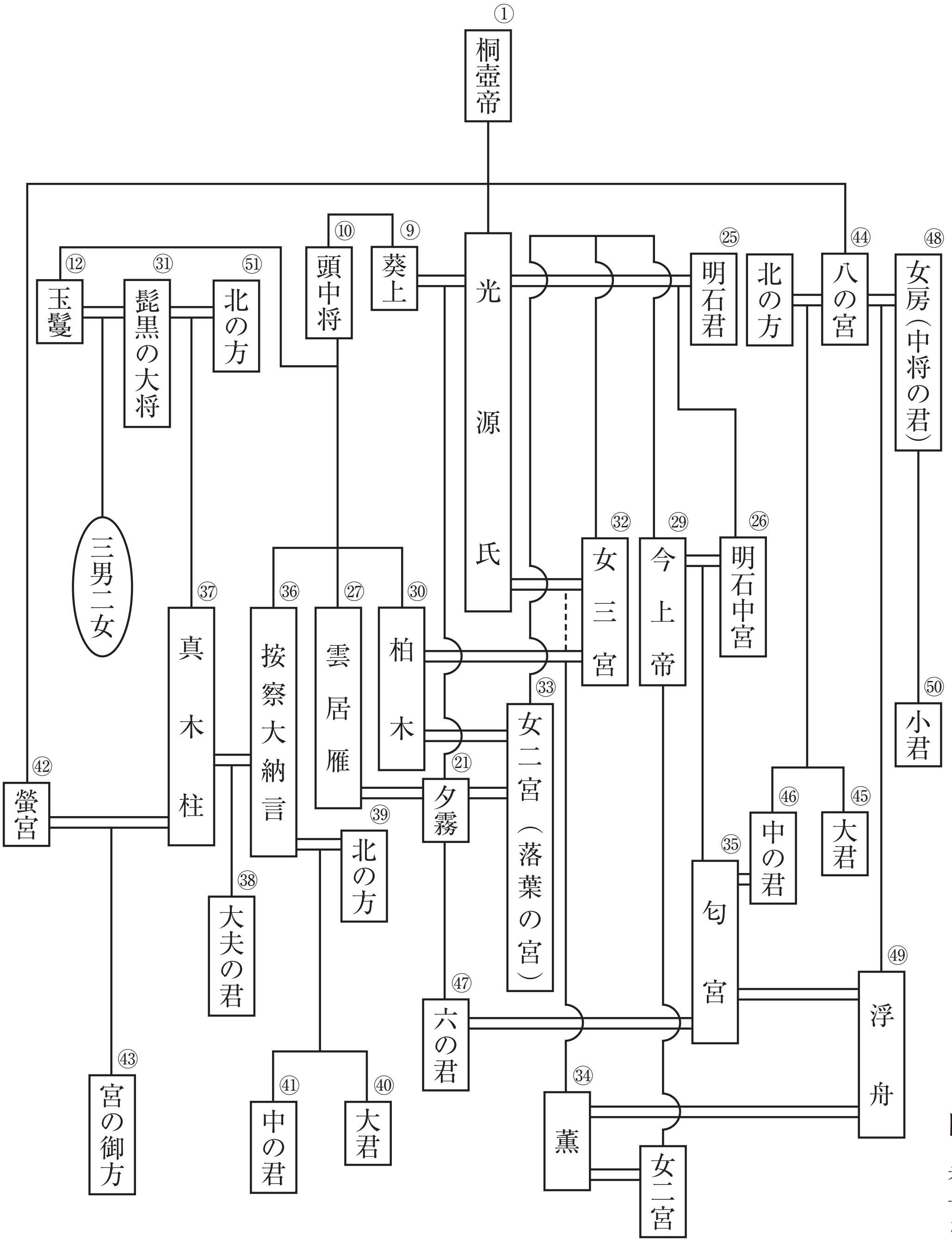
病床に伏している紫上は一向によくならず、相変わらず出家を願い続けるが、源氏は決して聞き入れない。さらに容態が重くなり、㉖明石中宮がお見舞いに来る。明石中宮は今上帝との間に息子（㉟匂宮（におうのみや））を設けており、匂宮は紫上のことを慕っていた。紫上はまだ幼い匂宮に「大人になったら、ここに住みなさって、この部屋の前にある紅梅と桜とは、花の季節に心をとどめて忘れずに鑑賞なさってください。そのような折には、仏壇にも（花を）お供えください」とそれとなく遺言を残す。秋の夕暮れ、明石中宮がまたお見舞いに来て、源氏と三人で歌を詠みかわし、その直後に紫上は、中宮に手を取られながら亡くなる。源氏は悲しみのあまり、紫上から離れようとしなかった。

新春を迎えるが、源氏の心はふさがったまま。年が明けたら出家をしようと考えている源氏は、その準備を進める。紫上からの手紙をも破って燃やしてしまう。源氏は、六条院で行われた御仏名の時に、久しぶりに公に姿を現し、昔から知っている僧や貴族たちがその昔よりも一層輝いた姿を見て涙を流した。

＊この次に【雲隠】という巻名だけが伝わり本文が現存していない巻がある。42帖からは源氏は出てこないので、この間に源氏死去。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈『源氏物語』人物関係図⑵〉



※人物関係図⑴と同一人物は⑴と同じ番号をふっています。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈42帖「匂宮（匂兵部卿）」～54帖「夢浮橋」〉（＊45帖「橋姫」～54帖「夢浮橋」＝宇治十帖）

㉑夕霧は㉝落葉の宮を六条院の夏の町に住まわせる。そして夕霧は、㉗雲居雁と落葉の宮のところに、一日交代で月十五日間ずつきちんと通う。

㉙今上帝と㉖明石中宮の子である三の宮〔＝㉟匂宮〕が元服をして兵部卿（ひょうぶきょう）となる。兵部卿〔＝㉟匂宮〕は、自由な恋愛を望む明るい活発な性格。光源氏〔本当は㉚柏木〕と㉜女三宮の子㉞薫は、⑱冷泉帝と㉒秋好中宮にかわいがられて育つが、薫は自分の出生に関して不審に思っており、出家をしたいとまで考えるような根暗な性格である。薫は生まれつき、仏の身にあるという香りが身体からしていた。兵部卿はそんな薫に対抗して焚物に熱心になり、「匂ふ兵部卿、薫る中将」と世間で呼ばれた。

柏木の弟の㊱按察大納言（あぜちのだいなごん）は㉛髭黒の大将の娘の㊲真木柱（まきばしら）と結婚して息子〔㊳大夫の君〕がいる。按察大納言には亡くなった㊴北の方（＝「夫人」の意味）との間に二人の娘〔㊵大君（おおいぎみ）（＝「長女」の意味）・㊶中の君（なかのきみ）（＝「次女」の意味）〕がおり、真木柱にも亡くなった㊷螢宮との間に姫君〔㊸宮の御方（みやのおんかた）〕がいた。大君は東宮のもとへ入内しており、按察大納言は「中の君を匂宮の嫁にしたい」と考えていたが、匂宮は宮の御方に興味があった。が、宮の御方は消極的な性格であった。真木柱はそんな娘の恋愛に悩む。

⑫玉鬘は㉛髭黒の大将が亡くなり、大将との間にできた三男二女の将来をどうしていくかに悩む。そんな中、玉鬘邸に若者たちが集まって楽器を演奏したが、㉞薫の和琴を聴いた玉鬘は、亡き父の⑩頭中将〔内大臣〕や弟にあたる㉚柏木に似ていることに気づくという出来事があった。結局、玉鬘の二女のうちの長女〔大君〕は冷泉院のもとへ参院させ、寵愛を受ける（人物関係図では省略）。大君は女の子と男の子を儲けるが、周囲の嫉妬に苦しみ、里に戻ることが多くなった。そして、次女〔中の君〕は今上帝へ入内させた（人物関係図では省略）。

その頃、桐壺帝の第八皇子（源氏の異母弟にあたる）の㊹八の宮が時勢とともに落ちぶれ、今は宇治で娘二人〔㊺大君・㊻中の君〕と暮らしながら出家をしたいと考えていた。薫は八の宮の存在を知り、宇治に通うようになり、たまたま大君と中の君の姿を垣間見て興味を持つ。八の宮の侍女の中に、亡き柏木の乳母の娘である老女房がおり、その女房から薫は自分の出生の秘密〔本当の父は源氏ではなく柏木だということ〕を知る。薫から姫君たち〔㊺・㊻〕の話を聞いた匂宮も、宇治の姫君た

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ちに興味を持つ。八の宮は厄年の時に、娘たちの後見役を薫に託した。一方、娘たちには「人の言葉に簡単になびいて、この宇治の山里からさまよい出るな」と、いい加減な男の誘いにのって結婚しないように訓戒してから、八の宮は宇治の山寺に行き、そこで亡くなる。

それから月日が経ち、薫は大君と対面し、匂宮と中の君を結婚させ、自分が大君を都に引き取るということを伝えるが、大君は八の宮からの遺言もあり「結婚しない」と決めていて、「(妹の) 中の君を薫と結婚させたい」と考えており、薫の話には取り合わない。が、薫は大君に夢中になり、八の宮の一周忌の際に求婚するがやはり拒絶される。薫は「中の君と匂宮を結婚させれば、大君が自分になびくかもしれない」と考え、匂宮を宇治に案内し、中の君と契りを交わさせた。結果、大君は薫になびくどころか、そんなことをした薫に失望する。一方、匂宮は、中の君との結婚を母の㉖明石中宮から反対され、父の㉙今上帝が㉑夕霧の娘〔㊼六の君〕との結婚を決め、宇治に通えなくなる。これを聞いた大君は、妹のことが不憫で悩み過ぎて病気になってしまい、薫が熱心に看病したが亡くなる。

後に明石中宮から許され、匂宮は㊻中の君を二条東院に引き取る。中の君は匂宮から大切に扱われ、「自分の娘を嫁がせよう」と思っている夕霧は不満を抱く。いよいよ匂宮と六の君の結婚の日取りも決まり、中の君は衝撃を受けるが、何もないように振舞う。中の君は妊娠していたが、匂宮は気づかない。渋々六の君と結婚した匂宮であったが、実際六の君に会ってみると予想以上に美しく、次第に中の君の元に通わなくなる。悲しむ中の君を薫が慰めていたがそれが次第に恋心になり、㊺大君も失った薫は中の君を匂宮に託したことも後悔していたので、中の君に思いを告げようとしたが、中の君が妊娠中であることに気づき諦めた。だが、それを感じた匂宮が中の君への愛情を復活させ、中の君の元へもまた通うようになった。

中の君は薫に、「実は異母妹〔八の宮が㊽女房（中将の君）との間にもうけた女の子。八の宮が認知をしなかったため、女房が育てている〕がいて、亡き大君に似ている」という話を伝える。その後、薫は偶然その異母妹〔＝㊾浮舟〕に出会い、垣間見をし、大君とあまりにも似ていたため驚愕するが、「認知もされていない女房の娘」という浮舟の身分の低さに積極的にはなれずにいる。後に、事情があり、㊽中将の君は㊻中の君に浮舟を預けるが、たまたま匂宮が浮舟を見つけ言い寄る。それを知った中将の君はすぐに浮舟を三条の小屋に移した。それを知った薫が三条の小屋へ行き、そのまま一夜を過ごし、翌朝浮舟を宇治に連れて行った。一方、匂宮は浮舟のことが忘れられない。浮舟の居所を知った匂宮は、宇治へ行き強引に契りを結

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ぶ。浮舟は異母姉の中の君に申し訳なく悩みながらも、強引な匂宮に惹かれてしまう。何も知らない薫は浮舟を都へ迎える決心をする。そんな中、匂宮は再度浮舟の元へ通う。浮舟は対照的な性格である薫と匂宮の二人の愛に悩み苦しむ。そして、薫と匂宮の使者が鉢合わせしてしまったことから、ついに薫に匂宮との関係がばれてしまい、薫から恨み言を言われ、匂宮との愛も忘れられず、悩み疲れた浮舟は自ら死を選ぶ。浮舟がいなくなり、宇治の山荘は大騒ぎとなるが、事情を知っていた女房が「宇治川に身を投げたのだろう」と思う。浮舟の母親の中将の君も嘆き悲しむが、世間体があるので、亡骸がないままその日のうちに葬儀を行った。浮舟の死を知った薫は、自分が宇治に放置していたことを後悔し、匂宮はショックのあまり引き籠ってしまう。

月日が経ち、それぞれ新しい恋をするが、薫はやはり心のどこかで宇治の姫君たち（大君・中の君・浮舟）が忘れられない。一方で浮舟は、実は生きていた。「宇治川へ身を投げよう」と思っていた浮舟は、そのまま宇治川のほとりで気絶をしてしまっており、たまたまそこを通りかかった横川の僧都に助けられる。僧都は浮舟を妹の尼に託す。妹尼は実の娘を亡くしており、浮舟のことをとても大切に看病した。看病のおかげで、意識を取り戻した浮舟は、自分が死ねなかったことがわかると「出家をさせてほしい」と願う。妹尼が留守の間に横川の僧都に懇願して、浮舟は出家を遂げる。横川の僧都は㉖明石中宮と知り合いで、薫は明石中宮から「横川の僧都が宇治川のあたりで女性を助けた」という話を聞き、浮舟の異母弟の㊿小君（こぎみ）と一緒に横川の僧都の元を訪れる。薫は横川の僧都からその女性の詳細を聞き出し、浮舟であると確信する。翌日、小君が薫の使者として、薫と僧都からの手紙を託されて、浮舟のいる小野へ訪れる。浮舟は簾越しに小君を見て動揺するが、対面することを拒否する。薫からの手紙を渡され、変わらぬ筆跡と紙の香りに思わず泣いてしまうが、「宛先違いでは」と言って受け取らなかった。小君は返事ももらえずむなしく薫の元へ帰った。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講　復習問題

①「女手を心に入れて習ひし盛りに」の意味として、最適なものを次の中から選べ。

ア　漢字に心を奪われて熱心に習っていたころに
イ　仮名文字を熱心に学んでいたころに
ウ　女性の心を手に入れようとあれこれ模索していたころに
エ　女性からの手紙を熱心に集めていたころに

②「おどろおどろしく」の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　あきれ果てて　　イ　ものものしく
ウ　泥にまみれながら　　エ　びっくりした様子で

③「昼ははしたなき心地して、暮れてぞのぼる。」の傍線部の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　腹立たしい気持ち　　イ　不思議な気持ち
ウ　愉快な気持ち　　エ　みっともない気持ち
オ　待ち遠しい気持ち

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「うとくおぼすべからず。」の傍線部の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　つらく　イ　よそよそしく　ウ　不満に
エ　心配に　オ　不思議に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講『源氏物語』〈宿木〉

次の文は、『源氏物語』宿木巻の一節である。中の君（女君）を妻としていた匂宮（宮）は、時の権力者である右大臣（右大殿（みぎのおほいどの））の娘との縁談を断り切れず、しぶしぶながら承諾した。その婚儀は八月十六日の夜に予定されている。これを読んで、後の問に答えよ。

右大殿には、六条院の東の御殿（おとど）磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければ、「いとしも御心に入らぬことにて、いかならん」と安からず思ほして、*案内したまへば、「この夕つ方内裏（うち）より出でたまひて、*二条院になんおはしますなる」と人申す。(1)思（おぼ）す人持（も）たまへればと心やましけれど、今宵過ぎんも人笑へなるべければ、御子の頭中将して聞こえたまへり。

大空の月だにやどるわが宿に待つ宵すぎて見えぬ君かな

宮は、「なかなか*今なんとも見えじ、心苦し」と思して、内裏におはしけるを、*御文聞こえたまへりける、*御返りやいかがありけん、なほいとあはれに思されければ、忍びて渡りたまへりけるなりけり。らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、Aいとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともに月をながめておはするほどなりけり。女

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、(2)いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなく冷(さ)ましたまふことなれば、ことに*聞きもとどめぬさまに、*おほどかにもてなしておはする気色いとあはれなり。

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもBいとほしければ、出でたまはんとて、「(3)今いととく参り来ん。ひとり月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ。御後手(うしろで)を見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、「心憂きものは人の心なりけり」と我ながら思ひ知らる。

（『源氏物語』より）

注（＊）

案内したまへば＝右大臣が人を遣わして匂宮の様子を探らせなさったところ。
二条院＝匂宮が中の君と共に住んでいる屋敷。
今なんとも見えじ＝今日が婚儀の日であると、中の君に知られないようにしよう。
御文＝匂宮から中の君へのお手紙。
御返りやいかがありけん＝中の君からのお返事はどのようであったのだろうか。語り手の推測。
聞きもとどめぬさま＝匂宮の縁談を気にもとめない様子。
おほどかに＝おっとりと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部（1）を、主語を明らかにして現代語訳せよ。

問二　傍線部（2）（3）を現代語訳せよ。

（2）＝

（3）＝

問三　傍線部Ａ・Ｂは、いずれも匂宮の気持ちを述べたものである。それぞれどのような気持ちか、説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　波線部における中の君の心理を説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講　復習問題

①「心もとなく」はどのような意味か。最適のものを次の中から選べ。

ア　不満に　　イ　不本意に　　ウ　気休めに
エ　待ち遠しく　　オ　情なく

②「な泣きたまひそ」の口語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　泣くかもしれない　　イ　泣いてはいけない　　ウ　お泣きなさるな
エ　泣くだろうな　　オ　お泣きなさるだろう

③「今はいかで見聞かずだにありにしがな」の現代語訳として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　今は何とかしてせめてあの人に関するうわさだけでも聞きたい
イ　今ではどんなに小さなことでもあの人について知らないことはない
ウ　今までどうしてあの人のうわさを耳にもせず過ごしてきたのだろう
エ　今はどうにかしてあの人のことを見たり聞いたりもせず過ごしたい
オ　今までどうしてあの人のことを見聞きせずにいられたのかわからない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④「墨染の袖も絞るばかりなる気色」とあるが、何をどのように表現しているのか。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　山科の中将入道の信仰心の篤さを、衣の色が墨が滴るほど濃くなったと表現している。
イ　山科の中将入道の深く悲しむ姿を、涙で濡れた袖が絞れるほどであると表現している。
ウ　世間の人びとの悲しみを、葬列を見送る人たちの雨に濡れる姿によって表現している。
エ　葬列が早朝の大路を進む様子を、朝露で棺の中までも濡れてしまったと表現している。
オ　葬列が勢いよく進む様子を、車を引く従者の衣が汗で絞れるほどであると表現している。

⑤「袂乾く世なき」とはどのような事柄を表していると思うか、正しいと思われるものを次の中から選べ。

ア　いつも雨が降っているので、着物がぬれてしまい、干して乾かすことが出来ないこと。
イ　袂が長すぎるので、毎日の仕事ですぐに濡らしてしまうこと。
ウ　古い着物なので、いつもじっとりと湿っていて乾かないこと。
エ　忙しくて昔を思い出している暇も無いことを比喩的に袂が乾く暇もないということで、「袂乾く世なき」と言うこと。
オ　古い知己を思って泣いてばかりいて、着物の袂で涙を拭うので、涙で袂が濡れて、乾かす暇も無いこと。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講『苔の衣』

次の文章は、鎌倉時代に成立した王朝物語『苔(こけ)の衣(ころも)』の一節である。主人公の大将は、愛妻の死を悲しみ、両親と姉（中宮として入内(じゅだい)している）にそれぞれ手紙を残して、密(ひそ)かに出奔(しゅっぽん)し、出家するために比叡山(ひえいざん)に向かう。その翌日、胸騒ぎを覚えた大将の両親が、大将の住まいに使者を遣わして様子を尋ねるところから文章が始まっている。よく読んで、後の設問に答えよ。

京(きやう)には、（注一）殿(との)・上(うへ)何となく心騒ぎするやうにて、うちとけても（a）大殿籠(おほとのごも)らぬに、夢などもいと心得ずものさわがしきやうなれば、明けも果てぬほどに（注二）三条殿(どの)を尋ねきこえ給ふに、（注三）「昨日(きのふ)その御方(かた)へ渡り給ひし後は、いまだ帰らせ給はぬ」よしを（注四）大弐(だいに)の乳母(めのと)申したれば、「いかなる事にか」と御胸さわぎて、また内裏(だいり)を尋ねきこえ給へば、「昨夜(よべ)出で給ひにき」など聞こえさするに、いと心あわたたしきやうに思(おぼ)さるるほどに、大弐の乳母御出居(でゐ)の方(かた)を見るに、（注五）心得ぬ御手習ひ、常の事といひながらいとまがまがしきに、傍(かたは)らに御文(ふみ)二つあれば、（注六）書き付けのままに取りて参らする。殿・上は、文と聞き給ひて、御心落ちゐて急ぎ開(あ)けて見給へば、いとよく書きつけられたる事どもを見給ふに、①御心の内なのめならむやは。母上はものものたまはず、ひきかづきて、やがて伏し給ひぬる後、みじろきもし給はず、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ただ亡き人のやうにぞものし給ひぬる。②あやしげなる子供のあまたあるだに親の心は皆かなしく思ひ捨て難くこそおぼゆるに、慰(なぐさ)むかたおはせず。院・(注七)内裏(うち)をはじめ奉りて、世の中にとりて、才(ざえ)・才学(さいかく)・みめかたちにつけても、またなくいみじき光とのみ誉(ほ)めののしられ給へる御有様を、行方(ゆくへ)なく惑(まど)はし給ひぬるは、げに時の間(ま)に限りあらむ御命もいかがとぞ見え給ふ。殿は、「今はさすがに残り少なくなりたる我らを(注八)見置きては、いみじからむ(注九)仏(ほとけ)の御迎へなりともいかでか(b)左右(さう)なく参り給ふべき。③いとかばかりまで思ひ惑はし給ひては、いみじく願ひ給ふらむ道の妨(さまた)げにもならずやあるべき。かくまで思ひ捨てられたる身は恥づかしくもつらくもあれば、いかでかく思はじ」と思し返せど、(注十)常よりも思ひ乱れつつ立ち給ひし面影(おもかげ)思し出づるに、まだしきに人悪(わろ)く恋しさ耐へ難くて、御声も惜しみ給はず、「何事をいとかくまで思ひて、さばかりあたらしかりつるさまをば、今はやつしや果て給ひぬらむ。④掌(たなごころ)の玉よりもなほ危(あや)ふく、朝夕(あさゆふ)の出で入りにつけて安き空なく、いたはしうのみ思ひ習はしたるに、⑤限りあらむ別れにてだに忘るる世あるまじきを、行方も知らず惑はし給へるには、(注十一)なほつらく」おぼえ給ふに、(注十二)「返す返す思ひ嘆かせ給ふな」とのみ書き給ひたる文字様(もじやう)、墨付きなど、物おぼえぬ心にも、今はいと限りと思したるにや、言ひ知らず見所ありて美し

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

きを、「かく(注十三)久しかるまじうてや、よろづかくのみ優れ給ひけむ」と、とにかくに足摺りとかやもしつべくも惑ひ給へる御様ぞ(c)ことわりなる。（中略）

中宮もこの文御覧ずるに、あはれに悲しう思さるること限りなし。「常より殊に思し乱れたりし有様は、まことに怪しかりしかど、ただ例のこととのみ思ひつつ、はかばかしう聞こえさすることなどもなくて止みにしよ」と頼むかたなくもの心細くさへ思さるる。同じ妹背と言ひながら、限りなく思ひ交はし給へる御仲なれば、げにいかで(d)おろかに思されむ。(注十四)姫君はかやうのことを聞き給ふに、(注十五)母上の折はさすがに幼くて、はかばかしう思し分きたる方もなかりしに、これはいとあはれに、我が行く末ものはかなく思されて、しほしほと泣き給ふを、(注十六)中将の乳母見きこえさするもいと悲し。帝もかく聞かせ給ひて、「⑥さばかりこの世に有り難かりしさまを、何事によりさしも思ひ捨てけむ」と、あはれに思されて、押し拭はせ給ふ。

殿・上のいたく思し入りて、はかなき(注十七)御湯などだに見入れ給はで、日数経るを、かひなき御事はさることにて、⑦これさへいと恐ろしく危ふくて、中宮も、もろともに慰めきこえまほしく思されて、御暇申し給へど、御気色の常よ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

りも(e)**後ろめたければ**、許し奉り給はぬを、いと本意(ほい)なく思したり。

（『苔の衣』より）

〔注〕

（一）殿(との)・上(うへ)――「殿(との)」は大将の父である関白、「上(うへ)」は大将の母のこと。関白夫妻には、大将と中宮の二人の子がいた。

（二）三条殿(どの)――大将の住まい。

（三）「昨日(きのふ)その御方(かた)へ渡り給ひし後は、いまだ帰らせ給はぬ」よし――「昨日そちらに（大将が）お渡りになった後は、まだお帰りになっていない」とのこと。前日、大将は親しい人々に心の中で別れを告げるべく、両親や、内裏(だいり)の姉のもとを訪れ、その後ひそかに「三条殿」に戻り、出居(でゐ)（寝殿造りの建物で居間及び客間として用いられた部屋のこと）に書き置きの手紙を残し、出奔した。

（四）大弐(だいに)の乳母(めのと)――大将の乳母。

（五）心得ぬ御手習ひ、常の事といひながら――「心得ぬ御手習ひ」とは、手紙とともに大将が残した、出家を意味する和歌のこと。「常の事」とは、大将が愛妻を失った後、常に仏道に心を寄せていたことを言う。

（六）書き付けのままに取りて参らする――宛名の通りに、大将の両親と中宮にそれぞれ送って差し上げた、ということ。

（七）内裏(うち)――帝のこと。

（八）見置きて――見捨てること。

（九）仏(ほとけ)の御迎へ――出家後の大将を仏が浄土へ迎えること。

（十）常よりも思ひ乱れつつ……――前日に大将が訪問した際の様子を言う。

（十一）なほつらく」おぼえ給ふ――心の内の言葉が地の文に連続する表現。「なほつらし」とおぼえ給ふ」に同じ。

（十二）「返す返す思ひ嘆かせ給ふな」とのみ書き給ひたる――手紙の主旨を言ったもの。

（十三）久しかるまじうて――世に長くいられないために。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（十四）姫君――大将の娘。中宮が引き取って育てている。
（十五）母上の折――姫君の母（大将の妻）が亡くなったとき。
（十六）中将の乳母――姫君の乳母。
（十七）御湯――重湯（おもゆ）や薬湯のこと。

問一　傍線部（a）から（e）はそれぞれどういう意味か、簡潔に記せ。

（a）＝
（b）＝
（c）＝
（d）＝
（e）＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部①「御心の内なののめならむやは」とは、誰の「心の内」がどのような状態であるというのか、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部②を、省略されている内容を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問四　傍線部③を、主語や目的語を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問五　傍線部④について、

（ア）「掌（たなごころ）の玉」とはどのようなものを表す比喩表現か、わかりやすく説明せよ。

（イ）「殿」は、何のことを「掌（たなごころ）の玉よりもなほ危（あや）ふく」と言っているのか、簡潔に記せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部⑤「限りあらむ別れ」とはどういうことか、簡潔に記せ。

問七　傍線部⑥とほぼ同じ意味のことを言っている箇所を、本文中から五十字以内で抜き出せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　傍線部⑦について、

（ア）「これさへいと恐ろしく危ふくて」とあるが、中宮は何を恐ろしく思ったというのか、「これ」の指し示す内容をわかりやすく説明せよ。

（イ）「御暇申し給へど」とあるが、中宮は何のために「御暇」を願い出たのか、わかりやすく説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　復習問題

①「左右なく」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　類（たぐい）無きものとして　　イ　時期も選ばず
ウ　大いに喜んで　　エ　ためらわずに

②「ことわりなり」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　あり得ることだ　　イ　当然だ
ウ　すばらしいことだ　　エ　礼儀だ

③「衣だに着ず、蓑笠に身をやつして、ここかしこ行ひありきける。」の傍線部はどのような意味か。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　蓑や笠を身にまとって変装をして
イ　法師になって、蓑一つをうち着て
ウ　蓑笠がすっかりぼろぼろになって
エ　蓑笠だけしかないほどに困窮して

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の文章中の傍線部「劣りてやはある」の「や」の文法的意味として、最も適当なものを後の中から選べ。

言はまほしきことをもこまごまと書きつくしたるを見る心は、めづらしくうれしく、あひ向ひたるに劣りてやはある。

ア　当然　　イ　疑問　　ウ　推量　　エ　強意　　オ　反語

⑤　次の文章を読んで、後の**問**に答えよ。

かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人はあさましうまほに見なすものを、ましていと面だたしう、なづさひ仕(つか)うまつりけん身もいたはしうかたじけなく思ほゆべかめれば、すずろに涙がちなり。

問　傍線部「まして」の後には省略がある。補うべき内容として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　「子ども」と「君」を平等に育てたことは
イ　「君」を「まほ」に見なさなかったことは
ウ　「かたほ」である「君」を「まほ」に育てあげたことは
エ　「かたほ」である「子ども」を「まほ」に育てあげたことは
オ　「まほ」である「君」を育てたことは

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十一講『今鏡』

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

＊大殿の伏見へおはしましたりけるも、(a)すずろなる所へはおはしますまじきに、雪の降りたりけるつとめて、「俊綱がいたく伏見ふけらかすに、にはかに行きて見む」とて、播磨守師信といふ人ばかり御供にて、にはかに渡らせ給ひたりければ、思ひも寄らぬことにて、門をたたきけれど、無期（むご）にあけざりければ、人々「いかに」と思ひけり。かばかりの雪のあしたに、(b)さらぬ人の家ならむにてだに、かやうの折節などは、その用意あるべきに、いはむや殿の渡り給へるに、かたがた思はずに思へるに、開けたる者に、遅く開けたるよし、かふつありければ、「雪を踏み侍らじとて、山をめぐりて侍る」と申しければ、もとより開けまうけ、またとりあへず急ぎ開けたらむよりも、ねんに興あるよし、人々言ひけるとか。

＊修理の大夫騒ぎ出でて、雪御覧じて御物語などせさせ給ふほどに、師信「かく渡らせ給ひたるに、いで、しかるべきあるじなどつかまつれ」と催しければ、俊綱「今＊贄殿参り侍りなむ」と申しければ、「人にも知られで渡らせ給ひたれば、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

賛殿参ることあるまじ。日もやうやうたけて、いかでか御まうけなくてあらむ」と言ひければ、殿笑はせ給ひて、ただ「せめよ」など仰せられけるほどに、家の司なるあきまさといひて、光俊・有重などいふ学生の親なりしをのこ、けしき聞えければ、修理の大夫立ち出でて、帰り参りて、「(c)あるじして聞こし召さすべきやう侍らざるなり。御台などの新しきも、かく御覧ずる山のあなたの倉に置きこめて侍れば、便なく取り出づべきやう侍らず。あらはに侍るは、皆人の用ゐたる」よし申しければ、「何のはばかりかあらむ。ただ取り出だせ」と仰せられければ、「さば」とて立ち出でて、取り出だされけるに、いろいろの狩装束したる伏見侍十人、いろいろの袙(あこめ)に、いひしらぬ染めまぜしたる帷子(かたびら)、括(くく)り、かけとぢなどしたる雑仕(ざふし)十人ひき連れて、倉の鍵持ちたるをのこ、先に立ちて渡るほどに、雪に映えて、(1)わざとかねてしたるやうなりけり。先に跡踏みつけたるを、しりに続きたる男女、同じ跡を踏みて行きけり。かへさには、御台、高杯(たかつき)、白銀の銚子など、一つづつささげて、鍵持ちたるは、このたびは後(しり)に立ちて帰りぬ。

かかるほどに、上達部・殿上人、蔵人所の家司、職事、御随身など、さまざまに参りこみたりけるに、この里かの里、所々にいひしらぬ供(そな)へども、目もあやなりけり。師信「いかにかくはにはかにせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけるか」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

などたはぶれ申しければ、俊綱の君は「(2)いかで、かかる山里に、かやうの事侍らむ用意なくては侍るべき」などぞ申されける。

伏見にては、時の歌詠みどもつどへて、和歌の会絶ゆるよなかりけり。伏見の会とて、いくらともなく積りてなむあなる。「*音羽の山のけさは霞める」など詠まれたる、いと優に侍るかし。かやうにもて興ぜらるるあまりに、(3)ふけらかし参らせられけるにこそ。*四条宮の女房、あまたあそびて、暮れぬさきに帰り給ひければ、修理の大夫、

A　都人暮るればかへる今よりは伏見の里の名をもたのまじ

となむ詠み給ひける。

（『今鏡』による）

＊大殿―藤原師実。
＊修理の大夫―橘俊綱。
＊贄殿（にへどの）―調理をする人。
＊「音羽の山のけさは霞める」―『後拾遺和歌集』に見える俊綱の和歌の下句。上句は「逢坂の関をや春も越えつらむ」。
＊四条宮―藤原寛子、後冷泉天皇の皇后。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部（a）（b）（c）を現代語訳しなさい。

（a）＝

（b）＝

（c）＝

問二　橘俊綱がとった傍線部（1）の具体的な行動を、問題文から十字以内でそのまま抜き出しなさい。

問三　傍線部（2）「いかで、かかる山里に、かやうの事侍らむ用意なくては侍るべき」について、「かやうの事」を具体的に説明して現代語訳しなさい。

問四　傍線部（3）「ふけらかし参らせられけるにこそ」について、橘俊綱がそのようにした理由を説明しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問五　Ａの和歌について、使用されている技法を説明した上で、現代語訳しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十一講　復習問題

①「いかなる身の宿世(すくせ)にて、かばかりの人の、すずろなる歩きをし給ふらむ」の傍線部の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　一途(いちず)な
イ　無理な
ウ　無意味な
エ　あわただしい

②「御手書かせたまふことをぞ、わざと書きやつさせたまひける」とありますが、どのようにしたのですか。その説明として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　兄が書いたものをお手本にして、故意にその筆跡を偽造してみせた。
イ　自分の筆跡が兄に見劣りしないように、兄の字体を積極的にまねた。
ウ　兄が書いたものにわざわざ手を加えて、字を下手に見せようとした。
エ　自分の筆跡を兄のものと比較されないよう、意識的に粗雑に書いた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文章を読んで、傍線部の意味として、最も適切なものを後の中から選べ。

大鷦鷯(おほさざき)の天皇の、たかみくらにのぼらせ給ひて、詠ませ給へる御製、

高き屋にのぼりて見ればけぶり立つ民のかまどもにぎはひにけり

〈中略〉かまどなどは、歌に詠まむには卑しき詞なれど、かみ詠みおかれぬれば、はばかりなし。

ア　これ以外に神が詠んだ歌の中にもあるので、用法に問題はない
イ　古い時代から詠み継がれているので、由緒正しい歌語と言える
ウ　すでに天皇が詠んでいるので、歌に詠み込んでも差し支えない
エ　高貴な身分の人が詠む歌の題材としては、似つかわしくない

④　「あしたの雪の日にあへる如く、じみじみと色変じて、忽(たちま)ちむなしく枯れにけり。」の傍線部の意味として、最適なものを次の中から選べ。

ア　明日が雪であることを予告するように
イ　あたかも雪の日の再会を約束するように
ウ　明日の雪が二人の来世を祝福するように
エ　さながら朝の雪が太陽の光でとけるように

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　『保元物語』

注(1)新院、母屋(もや)の御簾(みす)を引きほころぼして叡覧(えいらん)あり。竜顔頗(すこぶ)る鬱(ゑつぼ)に[A]入らせたまふ。注(2)左大臣殿、大床に候(さぶら)ひたまひけるが、遥(はる)かに見出(い)だして、笑みまけて、「注(3)為朝、既に参りて候ふ。実(まこと)にゆゆしき兵(つはもの)にて候ひけり。一人当千とはこれをこそ申し候ふらめ」とて、[B]もつてのほかに御感あり。「為朝、[C]合戦の次第、計らひ申せ」と仰(おほ)せ下さる。畏(かしこ)まつて申しけるは、「為朝、幼少より注(4)鎮西に居住仕(つかまつ)りて、合戦に遭ふ事、既に廿(にじゅう)度に余り、卅(さんじゅう)度に及ぶなり。或いは敵を落とし、或いは敵に落とさる。しかるに、毎度勝に乗る注(5)先蹤(じょう)を勘(かんが)ふるに、夜討にしかず。天の明けざる先に、内裏高松殿に押し寄せて、三方に火を掛け、一方より攻めんずるに、火を遁(のが)るる者は矢を遁れず、矢を遁るる者は火を遁るべからず。注(6)[D]舎兄にて候ふ義朝ばかりこそ、手甚(いた)く防ぎ候はんずれ。それをば、為朝、真中仕りて射落しなんず。そのほかの奴原(やつばら)をば、太刀(たち)引き抜きて真中に駆け入り、遠からん者をば注(7)さしおよびて、片手打ちに切りては落し切りては落し、薙(な)ぎ落し、払ひ落し、近付く者をば掻(か)い掴(つか)うで、注(8)下げ切りに切りては落し、切りては捨て、或いは頸(くび)捩(ね)ぢ切り、腕(かひな)引き抜き、引き割きなどして、馳(は)せ廻(めぐ)らば、注(9)行疫神はいさ知らず、誰かは面を向ふべき。まして、清

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

盛などがへろへろ矢は、物の数にてや候ふべき。［E］その時、定めて、行幸他所へなり候はんずらん。御輿（みこし）に矢を進（まゐ）らせ候ふべし。これ、為朝が放つ矢にて候ふまじ。天照大神・正八幡宮の放させたまふ御矢にて候ふべし。注(10)駕輿丁、矢に恐れて御輿を打ち捨て奉り、逃げ散り候ひなん。その時、行幸をこの御所へなし奉る事、注(11)時剋を廻すべからず」と、［F］詞（ことば）を放ち、ものげもなくぞ申しける。

（『保元物語』による）

注

(1) 新院――崇徳上皇。第七十五代天皇。保元の乱では弟の後白河天皇と対立した。
(2) 左大臣殿――藤原頼長。保元の乱では兄の忠通と対立した。
(3) 為朝――源為朝。源為義の八男。弓の名手で鎮西八郎を称す。保元の乱では兄の義朝と対立した。
(4) 鎮西――九州の別称。
(5) 先蹤――前例。先例。
(6) 舎兄――実の兄。
(7) さしおよびて――近付いて。
(8) 下げ切りに切り――上から下へ切り下すこと。
(9) 行疫神――疫病神。
(10) 駕輿丁（かよちょう）――輿をかついで運ぶ男。
(11) 時剋（こく）を廻す――時を費やす。時間をかける。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　Aを単語に分けて、それぞれ文法的に説明しなさい。

＊解答例〈「書きにけり」の場合〉

カ行四段活用動詞「書く」の連用形「書き」／完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」／過去の助動詞「けり」の終止形「けり」

問二　Bのように感じた理由について説明しなさい。

問三　Cの具体的な内容について百字以内で説明しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　Ｄを現代語訳しなさい。

問五　Ｅを現代語訳しなさい。

問六　Ｆから読みとれる為朝の様子・態度について、作者がそう表現した意図をふまえつつ説明しなさい。

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　復習問題

①　「前栽（せんざい）のをかしきなかに歩かせたまひて、『人は草葉の露なれや』などのたまふ。」の傍線部「歩かせたまひて」の「せ」の文法上の説明として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　使役の助動詞の連用形　イ　サ変動詞の活用語尾
ウ　尊敬の助動詞の連用形　エ　過去の助動詞の未然形

②　「いかにすることにかあらむ、…」の傍線部の文法上の意味として、最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　完了　イ　打消　ウ　断定　エ　存在　オ　過去

③　「帰寂したらんにはしかず」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　命を捨てたであろうと推測して、それには間違いがない
イ　命を捨てようと決心して、それに迷いがない
ウ　命を捨てようと決心して、それが周囲に知られることはない
エ　命を捨てるならば、それに優ることはない
オ　命を捨てるならば、それほど愚かなことはない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の文章を読み、傍線部の意味として最も適当なものを後の中から選べ。

あやしくわびしげなるしづの女が、かたみといふ物をひぢにかけて、菜を摘みてゐざりありくを、「ゆゆしげなるものの姿かな」と見るほどに、…〈以下略〉

ア　たいそう大げさな
イ　たいそう気味悪い
ウ　たいそう気がかりな
エ　たいそうつまらなそうな
オ　たいそうおそれ多い

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　模範解答

問一　ふつつかな娘を私は（大切に）育てていますが

問二　娘の将来のことを安心して私は出家したい

問三　関白の娘をぜひ妻にしたいということをそれとなく示す手紙（を書くこと）

問四　なんとかして関白が娘との縁談を思いとどまりなさる方法があればなあ

問五　ａ　尊敬語の本動詞サ行下二段活用「のたまはす」の終止形の活用語尾

ｂ　尊敬の助動詞「る」の終止形

ｃ　可能の助動詞「る」の連用形

〈現代語訳〉

その頃、関白殿が、「この少将を婿候補に」と数か月来心に決めなさり、参内のついでに（大納言邸に）参上なさって、昔や今の話などを申し上げなさって、「このようなことを申し出るのは恥ずかしいことだが、ふつつかな姫〔＝娘〕を（私は）育てていますが、まだ適当な縁が無くて、気がかりに思われます。少将が、将来を期待できる人であるようなので、（娘を少将と）結婚させ申し上げて、（娘の将来のことを）安心して（私は）出家したいと思う」とおっしゃる。大納言が、たいそうもったいなく、喜び恐縮して、「これ以上の面目がございましょうか。ただすぐに仰せに従うつもりである」と、承諾申し上げなさる。関白殿はこのようなことを申し上げ決めたことを安心なさって、夜が更けたのでお帰りになった。

明けたので〔＝翌日〕、大納言は、少将をお招きになって、「関白殿が、ただ一人大切に育てていらっしゃるという姫でまだ世慣れていない姫を、たいそう見捨てがたく、お前と結婚させようとおっしゃるので、辞退申し上げにくく、『謹んで承ります』と申し上げたのである。良い日を選んで、（求婚の）お手紙などそれとなく書きなさいませ」と申し上げなさるので、少将は急にはなにも言うことがおできにならない。（少将は）うつむいて胸がつまって、なんとかして（関白殿が）このこと〔＝娘との縁談〕を思いとどまりなさる方法があればなあ、と人知れずお嘆きにならないではいられないで、いやになって立ちなさり、そ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

の夜はちょっと横になって夜をお明かしになり、様々思い乱れていらっしゃる。いとこの姫君が、何も知らずにいらっしゃるのに、このこと〔＝縁談〕をこうだと聞きなさったならば、どのようにお思いになるだろう、そうは言ってもやはり愛情の浅くない気持ち、様子のほどを思うと、ますます苦しくて、「気分がたいへんすぐれない」と言って臥してばかりいらっしゃる。

大納言からお使いがあって、「早くお手紙を書きなさいませ。気乗りしないことだとしても、聞き流して済ませられることではない」とおっしゃるので、（少将は）さからうこともできないのでお手紙をお送り申し上げなさる。

逢ふまでの……＝逢うまでのこれから先のことはまだわかりません（が）、（あなたを）恋しく思いはじめたのは前世からの因縁であることだなあ。

と書きなさって、人をお呼びになりお送り申し上げさせなさる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔重要単語〕　※「敬語」の「重要単語」は文法講座で既出のため、省いています。（第二講以降も同様。）

○つきごろ【月頃】…**数か月来**。
○かたはらいたし【傍ら痛し】…①**みっともない**。②**気の毒だ**。③**恥ずかしい**。
○あやし【怪し・奇し・異し】…**不思議だ**。
　【賤し】…**粗末だ**。**身分が低い**。
○ものす【物す】…①ある。いる。②いろいろな動詞の代わりに用いる。
○さるべき【然るべき】…①適当な。②そうなるはずである。③立派な。
○よすが【縁・因・便】…①**手段**。②**ゆかり**。③夫・妻などたよりとする相手。
○こころやすし【心安し】…①**安心だ**。②親しい。③簡単だ。
○かたじけなし【辱し】…①**恥ずかしい**。②**もったいない**。③ありがたい。
○とし【疾し】…①（時期が）**早い**。②（速度が）**速い**。
○かしづく【傅く】…①**大切に育てる**。②**大切に世話をする**。
○いはけなし【稚けなし】…**子どもっぽい**。
○せうそこ【消息】…①**手紙**。②訪れること。
○とみなり【頓なり】…**急なこと**。
○さすがに…**そうはいってもやはり**。
○いとど…①**ますます**。②そのうえさらに。
○ちぎり【契り】…①前世からの**約束**。②**因縁**。**男女・夫婦の縁**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二講　模範解答

問一　①　たまに人里離れた所〔＝山奥〕に行って
②　田舎に住み慣れた自分の目からは、目移りするほど都会の様子は、この上なく素晴らしくて
③　あまりにも人の往来が多く、騒々しいが

問二　（ア）ｅ　（イ）ｃ　（ウ）ｄ

問三　（ａ）からぶり　（ｂ）いにしへ〔え〕

問四　世間の知識人や学者などがみな、人里離れた閑静な場所を住みやすく好ましいと言っていることについて、中国の人達の思想をまねして〔＝中国の故事に倣って〕言っているだけで、世間一般の人とは違う考え方であると人から思われるように発言しているだけの人もきっといるはずであると疑っている。

問五　宣長は、人が多くて賑やかな場所に住むことを好んでいるが、江戸や大坂は人が多過ぎて騒々しいが、京都は適度な賑わいで、昔からの由緒ある神社やお寺が多くて尊く、全てが美しく優雅であるから。

問六　本居宣長　／　ｂ

〈現代語訳〉

代々の知識人や、また今の世で学問をする人なども皆、住居は、人里遠く閑静な山林を、住みやすく好ましくするようにのみ言っているそうだが、私はどういうわけか、まったくそうは思わず、ただ人が多く賑やかな場所が、好ましくて、そのような世間から離れている所などは、寂しくて、心も元気がなくなるように思われる。とはいえたまに人里離れた所に行って、一夜旅寝をしたなどということは、珍しい気がして、興趣あることに思われるが、そのような所に、常に住みたいとは、まったく思われない。人の心は様々であるので、人の姿が少なく閑静な所を、住みやすく思うとしたらそれももっともなことで、本当にそう思う人も、世間に多いにちがいないが、また例によって作為的な、唐風を装う文人趣味の真似から、そのように言いつくろって、一般の世の人の心と、異なる様子に、振舞うたぐいの人も、中にはいるにちがいないのではないか。このようについ疑ってしま

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

うのも、私の卑しい心の習性なのであろう。

私、宣長は、亨和の元年、京都に上っていた頃、宿っていた所は、四条の大路の南側の、烏丸の東方にある所であったが、家はやや奥まってあったので、物の気配はひっそりしていたが、朝方や夕暮れ時などには、門前に出てはあたりを見ると、道も広く晴ればれとした感じで、行ったり来たりする人も多く、とても賑やかなのは、田舎に住み慣れた私の目からは目移りするほど、（都の様子は）この上なく素晴らしくて、目が醒める心地がした。京といっても、全てがこのようではないだろうが、この四条の大路などは、特に賑やかなものであった。天下の三大都市の中でも、江戸と大坂は、あまりにも人の往来が多く、騒々しいが、（京は）適度の賑わいぶりで、多くの寺社など、昔からの由緒あるものが多く、尊く思われて、万事が美しく整い、全てのことが優雅であることなど、天下に、（私が）住みたいと思う所は、何といっても京を置いて、外にはないのであるよ。

〔**重要単語**〕

○れい【例】…①**先例**。　②**習慣**。　③普通。　④**いつものこと**。

○なべて【並べて】…①**総じて**。　②平凡。　③一面に。

○こよなし…①**はなはだしく違う**。　②とてもすぐれている。　③とても劣っている。

○ことに【異に・殊に】…①**とりわけ**。　②その上に。

○らうがはし【乱がはし】…①**乱雑である**。　②**騒がしい**。　③乱暴だ。

○よろづ【万】…①万。　②**万事**。

○よし【由】…①**由緒**。　②**手段**。　③**理由**。　④趣。　⑤事柄。　〜**とのこと**。　⑥**縁**。　⑦様子。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第三講　模範解答

問一　ア　身分が高い者も低い者も皆
　エ　暗い夜に一晩中降る雨
　オ　頼朝様のお命がご無事であろうか（＝頼朝様がご無事で生きていらっしゃるだろうか）ということを
問二　静が関東の繁栄を祝うべきなのに、反逆者の義経を慕う歌を歌ったから。
問三　娘の政子が、平家の敵で配流の身である源頼朝と逢瀬を重ねること。
問四　長年連れ添った義経を静が一途に慕い続ける心のさま。
問五　静が義経を慕う気持ちと自分が頼朝を慕う気持ちを重ね合わせた所。

〔現代語訳〕

静が、まず歌を吟詠して言うことには、
　吉野山……＝吉野山の峰の白雪を踏み分けて、山の中へ入って行った人（＝源義経）の行方が恋しいことです。
また別の曲を歌った後、和歌を吟詠する。その歌に、
　しづやしづ……＝静よ静よとあの人が繰り返し私の名を呼んで下さった昔を、もう一度今に取り戻す手立てがあればなあ。
このように歌ったので、社殿も鳴り動くほどに、身分が高い者も低い者も皆、面白いと思ったところに、二位殿（＝源頼朝）がおっしゃることには、「今、八幡の神前で私が芸を奉納するにあたり、どのようにも関東の繁栄を祝わなければならないのに、外聞もはばからないで、反逆者の義経を慕い、（祝いとは）別の曲を歌うことは、じつにけしからん」とおっしゃって、ご機嫌が悪くおなりになったので、御台所（＝北条政子）がお聞きになり、「あまりにお怒りを顔にお出しなさいますな。私の身においても思い当たることがあります。あなたがすでに流罪の人とおなりになって、伊豆の国にいらっしゃった頃、私とご縁が浅くない仲であると言っても、平家が繁栄していた時期なので、（私の）父北条殿（＝北条時政）も、そうは言ってもやはり時勢を恐れなさって、内密にこのことを、制止なさる。そうではありますがそれでもやはり（私は）あなたに心を通わせて、暗い夜に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

一晩中降る雨さえも厭わず、掻き上げた着物の裾も露に濡れ、ほんの少しの隙間から、あなたがいらっしゃるご寝所の中に忍び込みましたが、その後あなたが石橋山の戦場にいらっしゃるとき、（私は）一人伊豆山神社に残っていて、あなたのお命がご無事であろうかということを心配して過ごしていたので、昼にどれくらいか、夜に何度か、（嘆きのあまり）気を失うほどでした。その嘆きに比べますので、今の静の心もそのようであるのだろうとつい思われ、気の毒でございます。彼女がもし長年九郎殿〈＝義経〉に連れ添った親しみを忘れるほどでありますならば、貞淑な妻の心のありようではないでしょう。今の静の歌の姿は、表面には少しばかりの思いを傾けて、内面には深く嘆いた憤りをふくんでいます。たいそう可哀そうだとお思いになって、ぜひともご鑑賞なさってください」と、おっしゃると、二位殿はお聞きになって、（北の方と）一緒に涙をもよおしたご様子で、腹をお立てになるのをやめなさった。しばらくして、御簾の中から卯の花襲のお着物を静にお与えになった。

〔**重要単語**〕

○きしょく【気色】（「けしき」とも読む）…①**顔色**。②**意向**。③**気分**。

○よすがら【夜すがら】…**一晩中**。

○いたはし【労し】…①**苦しい**。②**気の毒だ**。③大切に世話したい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　模範解答

問一　ア　かえって　　イ　強引に　　ウ　だらしなく

問二　①　わけがあるのだろう

②　夢心地に不審に思って（私が賀茂の神人に）尋ねたところ

問三　敦文の勝ちでまさに勝負が決まる目前で、久清が追いついて敦文の襟に手をかけることができ、敦文が落馬したことによって久清が勝った点。

問四　a　助動詞、まし、未然形、反実仮想

b　終点の目印の鉾が、通常の位置に立っていたならば、久清はきっととっくに負けていたであろう

問五　a　久清が競馬に勝ちはしたが、院はご機嫌が悪かったということだ

b　久清が敦文のような技術のつたない者に、こんなきわどい勝ち方をしたから。

問六　イ、ク

〈現代語訳〉

建仁三年十二月二十日、北野神社の神宮寺に院がお出かけになって、競馬が十番行われたが、五番目に、左方は、院側の右の番長秦久清、右方は大将側の、下毛野敦文が、組み合わされることになった。久清は上手（な乗り手）である。敦文は技術がつたない者だったので、久清は勝負することを嫌って辞退申し上げたけれども、聞き入れてもらえなかったので、嫌な気持ちのままに、組んで競争することになったが、それにしてもかえって技術のつたない相手に負けたならば、もっと不本意なことになるだろうと（久清は）思った。

こうして久清が、北野神社の宿泊所から出立するときに、僧が一人来て「申し上げたいことがある」と言ったけれども、競馬の騎手は、その日は特に物忌みをして法師などには会わないことになっていたので、従者たちも聞き入れなかった。（ところが）この僧が強引に（会いたいと）言ったので、久清に告げた。久清は、わけがあるのだろうと思って、面会して尋ねたところ、僧

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

が言うには、「去る夜の夢に、この北野の馬場で、賀茂の神人と思われるものが、馬場のはずれに横に縄を引き張って、終点の目印などを手際よく用意しているので、夢心地に不審に思って（私が賀茂の神人に）尋ねたところ、『院側の右の先生〔＝久清〕の勝負のためである』と言うと思って目が覚めた。賀茂大明神の御処遇で、（あなたが）勝ちなさるでしょう」と告げたので、久清は、幼いときから賀茂神社にお仕えするものなので、嬉しくも頼もしく感じて、「勝った後、お礼に参上しよう」と言って返した。

勝負のときになって、久清と敦文が一組になって馬を走らせて、敦文が先に立って（走って）いたが、少しだらしなく見えたので、久清は相手を見くびって遠く離れたままで追いかけた。（ところが）敦文の馬が力走してもうすでに勝ちが決まったという時分に、（馬に）鞭を（あてるのを）止めて終点の目印のもとで安心して（敦文が）後ろを振り返ったときに、久清が追いついて、敦文の首のまわりの襟に手をかけて引いたので、敦文は落馬して久清が勝ってしまった。勝ったもののあまりに不思議に思って、久清が一丈の長さのものさしをあてて見たところ、終点の目印は、通常の位置よりも一丈ほど遠くに立っていた。あの僧の夢も思い合わせられて、賀茂の大明神の御処遇が、ありがたく感じられた。（終点の目印の鉾が）通常の位置に立っていたならば、（久清は）きっととっくに負けていたであろう。不思議なことであった。この僧には、（久清が）お礼を言ったとかいうことである。敦文程度の技術のつたない者に、こんなきわどい勝ち方をしたというので、（久清が競馬に）勝ちはしたが（院は）ご機嫌が悪かったということだ。まして（久清が）負けていたならば、きっとたいへんなことであろうから、大明神の御処遇は、ありがたいことであった。

〔重要単語〕

○なかなか【中中】…①**かえって**。　②（下に打消）とうてい（〜ない）。
○あながちなり【強ちなり】…①**無理矢理なさま**。　②異常だ。　③**一途だ**。
○やう【様】…①様式。　②様子。　③わけ。　④方法。　⑤〜ことには。
○しどけなし…①**だらしがない**。　②ゆったりしている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第五講　模範解答

問一　①　あなたお一人ぐらいは、どうして刀を持っていて不都合〔危険〕なことがございましょうか、いや、ございません

②　お前〔あなた〕を遣わして、恋文を渡した人〔女房〕は、まだ宮中にいると聞いているか

③　この女性〔女房〕にも、重衡様は慕われていたのになあと、気の毒に思われて

問二　守護の武士たち〔ども〕が　平重衡の手紙〔中将の文〕を

問三　(b)　受身の助動詞の連体形

(c)　尊敬の助動詞の連用形

問四　重衡の、自分が西国へ下る時、言い寄っていた女性に手紙や伝言さえしなかったので、その女性が、自分の様々な愛の言葉や約束は全て偽りだったのだと思っているだろうことを恥ずかしく思う気持ち。

問五　本当に、重衡様が捕えられているのは、世の人や重衡様本人が言っていたとおり、奈良の寺々を焼き討ちにした罪の報いだと私も思われる

問六　今はこうして囚われの身で醜聞をさらしてつらい身の上となったが、もう一度あなたに逢いたいという心情。

（四十九字）

〔現代語訳〕

三位中将〔＝平重衡〕が長年召し使いなさった従者に、木工右馬允知時という者がいる。〔知時は〕八条の女院にお仕えしていたが、土肥次郎のもとに出向いて、「私は、中将殿に以前召し使われていました誰それと申す者ですが、〔中将殿が都落ちした時に〕西国へもお供申し上げようということを考えましたが、〔私は〕八条の女院にも同時にお仕えする者ですので、力が及ばず〔都に〕残っていますが、今日大路で〔捕えられている中将殿を〕拝見しますと、正視もできず、気の毒にお思い申し上げます。できますことなら、お許しをいただいて、近くに参上しまして、もう一度お目にかかり、昔の話でも申し上げて、お慰め申し上げ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たいと思います。（私は）たいした武士ではございませんので、合戦のお供をいたしたこともございません。ただいつもおそばにお仕えしただけでした。そうではあるが、やはり気がかりにお思いになりますならば、（私の）腰の刀を取り上げてお預かりくださって、ぜひお許しをいただきたいのです」と申し上げると、土肥次郎は情け深い男で、「（あなた）お一人ぐらいは（どうして刀を持っていて）不都合〔＝危険〕なことがございましょうか、いや、ございません。そうではあっても（念のために）」と言って、腰の刀を求めて預かって（知時を中将の部屋に）入れた。右馬允〔＝知時〕は並々でなく喜んで、急いで参上して（中将を）拝見すると、本当に思いつめなさっていると見受けられて、お姿もひどくすっかりしょんぼりとして座りなさっている（中将の）ご様子を拝見すると、知時は涙もまったくこらえることができない。三位中将もこれ〔＝知時〕を御覧になって、夢の中でまた夢を見るような感じがして、あれこれのこともおっしゃらない。ただ泣くばかりである。かなり長い時間が経って、昔や今の話などをなさった後、（中将が）「それにしてもお前を遣わして恋文を渡した人〔＝女房〕は、まだ宮中に仕えていると聞いているか」（と尋ねる）。（知時が）「そうお聞きしています」（と答える）。（中将が）「（私が）西国へ下った時、手紙もやらず、言い残すことさえなかったので、（私が彼女と交わした）現世だけでなく来世も一緒になろうという約束はすべて偽りであったのだなあと（彼女が）思っているであろうことが恥ずかしいことだ。手紙をやりたいと思うよ。探して行ってくれないか」とおっしゃるので、（知時が）「お手紙をお預かりしてまいりましょう」と申し上げる。中将が並々でなく喜んで、すぐに書いてお渡しになった。警護の武士たちが、「どんなお手紙でございましょうか。（このままあなたをここから）出し申し上げるわけにはいかない」と言う。中将が「見せてやれ」とおっしゃるので、（知時は）見せた。（武士たちは手紙を見て）「差し支えないでしょう」と言って（手紙を知時に）渡した。

知時は（その手紙を）持って宮中へ参上したが、昼は人目が多いので、そのあたりに近い小屋に入って、日が暮れるのを待って、（女房の）部屋の裏口あたりにたたずんで聞き耳を立てると、この人〔＝女房〕の声と思われて、「いくらでもいる人の中で、（よりによって）三位中将が生け捕りにされて、大路を引き回されることよ。世間の人はみんな奈良（の寺）を焼いた罪の報いだと言い合っている。中将もそう言っていた。（中将が）『自分の心に（考えが）起こって焼いたのではないが、（配下に）暴徒化したやからが多くいたので、それぞれ勝手に火をつけて多くの堂や塔を焼き払う。葉末の露が（集まって）、幹の雫となるというから、私一人の罪になるだろう』と言っていた。なるほどそのとおりと思われる」とくどくど言い、さめざめと泣きなさっ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

た。右馬允は、この女房にも（中将殿は）慕われていたのになあと気の毒に思われて、「申し上げます」と言うと、（女房は）「どこから」と尋ねなさる。（知時が）「三位中将殿からお手紙がございます」と申し上げると、長年恥ずかしがって姿を見せなさらない女房が、切実な思いのあまりであろうか、「（手紙は）どこなの、どこ」と言って走り出てきて、直接自分で手紙を受け取って見なさると、西国から捕えられてきた様子や、今日明日ともわからない我が身の前途など、こまごまと書き連ね、最後には一首の歌があった。

涙河……＝涙が河のようにたくさん流れるほど、つらい評判を世間に広めている我が身であったとしても、もう一度あなたに逢う機会があればなあ。

女房はこれを見なさって、あれこれのこともおっしゃらず、手紙を懐に入れて、ただ泣くばかりである。

〔重要単語〕

○としごろ【年頃】…**数年来**。

○いとほし…①**気の毒だ**。②いやだ。③かわいい。

○おぼつかなし…①**はっきりしない**。②**気がかりだ**。③**待ち遠しい**。

○なのめならず【斜めならず】…**並一通りではない**。**格別である**。

○やがて…①**そのまま**。②**すぐに**。

○げに…①現実に。**なるほど**。②**ほんとうに**。

○うし【憂し】…①**つらい**。②**いやだ**。③にくい。④つれない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第六講　模範解答

問一　（１）成長し美しく整っている
（２）興ざめでしょうか
（３）仰々しいので

問二　斎宮の派手な色の衣装に対する不快な感情。（二十字）

問三　後深草院がご自身のお部屋に入りなさって、早くも、「どうすればよいか、どうすればよいか」とおっしゃる。

問四　院からの恋文を見ようともせず、返事を催促しても、何も言うことはないと寝てしまうような手応えのない所。（五十字）

問五　斎宮が気強く後深草院の誘いを拒むことを期待したが、すぐに心を許し受け入れたから。（四十字）

〔現代語訳〕

大宮院が、顕紋紗の薄墨色のお着物に、濃い鼠色のお着物を羽織りなさって、同じ色の小几帳を立てなさっている。前斎宮が、紅梅襲の小袖を三枚重ねたお着物に青い単衣のお着物（を着なさっているのが）、かえって見苦しかった。おそばづきの縁者としてお仕えなさる女房が、紫から白へだんだん色が薄くなるように五枚の着物を重ねて着て、礼装用の裳や唐衣なども無い。

前斎宮は二十歳を過ぎていらっしゃる。成長し美しく整っているご様子は、（伊勢の）神も別れを惜しみなさったのももっともで、花と言うならば、桜にたとえても、はた目にはどうであろうか（いや、桜にたとえてもおかしくはない）と見間違われ（るほど美しく）、（桜の花を隠す）霞のように（顔を隠すために）袖を重ねるその隙間もどうしようかしらと思うにちがいないご様子なので、まして抜け目のない（後深草院の）お心の内は、（前斎宮が）早くもどんなお悩みの種（になっている）だろうかと、よそながらも（前斎宮のことが）お気の毒に思われなされた。

お話をなさって、伊勢神宮のお話など、少しずつ申し上げなさって、（後深草院が）「今夜はひどく夜が更けました。ゆっくりと、明日は嵐山の落葉して裸になった木々の梢を御覧になって、お帰りなさい」など申し上げなさって、ご自分のお部屋へ入りなさっ

て、早くも（私に）、「どうすればよいか、どうすればよいか」とおっしゃる。思ったとおりだよと、（私が）おかしく思っていると、（後深草院が）「（お前が）幼い時から（私に）お仕えしたしるしに、このこと〔＝前斎宮との逢瀬〕を（前斎宮に）申し入れて実現させたとしたら、本当に（私に対する）愛情があると（私は）思おう」などおっしゃって、（私は）すぐに（前斎宮のもとへ）お使いに参上する。（後深草院からは）ただよくある様子で、「お目にかかれてうれしく（思います）、ご外泊は興ざめでしょうか」などで、こっそりと手紙がある。氷襲の薄様の紙であっただろうか。

知られじな……＝ご存じないでしょうね。たった今お会いした（あなたの）面影がそのまま（私の）心にかかって離れなかったのだとは。

夜が更けたので、（前斎宮の）おそばにいる女房も皆寄りかかって寝ている。（前斎宮）ご本人も小几帳を引き寄せて、おやすみになっているのであった。（私が）近くへ参上して、事情を（前斎宮に）申し上げると、（前斎宮は）お顔を少し赤らめて、たいして何もおっしゃらず、手紙も見るというふうでもなくて、置きなさった。（私が）「（後深草院には）何と申し上げましょうか」と申し上げると、（前斎宮が）「思いも寄らないお言葉は、何とも申し上げようもなくて」と言うだけで、またおやすみになってしまったのももどかしいので、（私は後深草院のもとへ）帰参して、このことを申し上げる。

（後深草院が）「とにかく、おやすみになっている所へ案内しろ、案内しろ」とお責めになるのもわずらわしいので、お供に参上するのはたやすいこと、（私は）案内して（前斎宮のもとへ）参上する。（後深草院は）甘のお着物〔＝上皇が着用する小直衣〕などは仰々しいので、大口袴だけで、（前斎宮のいる御几帳の内側へ）こっそりとお入りになる。

まず（私が）先に参上して、襖をそっと開けたところ、（前斎宮は）さっきのままでおやすみになっている。おそばにいる女房も眠り込んでしまったのだろうか、音を立てる人もなく、（後深草院が）体をかがめて忍び込みなさった後、どんな事々があったのだろうか。（後深草院を）お残し申し上げてよいことではないので、おそばに宿直している女房の傍らに寝ると、（その女房は）今になって目を覚まして、「これはどなたです」と言う。（私が）「お人が少ないようなのもお気の毒で、おそばに宿直をしています」と答えると、本当だと思って話をするのも、不用意なことよと（私は）情けないので、「眠たいわ。夜も更けました」と言って、眠ったふりをしていると、御几帳の内側も遠くないので、（前斎宮は）それほどお心を痛めることなく、早くも（後深草院に）心を許しなさったのだなあと思われるのは、非常に残念だった。（前斎宮が）気強く（後深草院の誘いを拒んで）夜を明かしなさっ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たならば、どんなにおもしろいだろうと思われたのに、すっかり夜が明けないうちに（後深草院はご自分の部屋に）お戻りになって、「桜は色合いは美しいけれども、枝はもろく、折りやすい花であるよ」などおっしゃったのは、思ったとおりだよと思われました。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔重要単語〕

○むつかし【難し】…①**不快である**。　②わずらわしい。　③気味が悪い。
○ねぶ…①**年をとる**。　②おとなびる。
○ことわり【理】…①**道理**。　②**理由**。
○くまなし【隈無し】…①曇りや**影がない**。　②**なんでも知っている**。　③隠しだてがない。
○しるし【徴・験】…①前兆。　②**霊験**。効き目。
【標・印・証】…①目印。　②証拠。　③合図。
【著し】…①**はっきりしている**。　②予想通りだ。
○まめやかなり【忠実やかなり】…①**誠実だ**。　②本格的なさま。
○すさまじ【凄じ】…①**興ざめだ**。　②さむざむとしている。　③程度がはなはだしい。　④あきれたことだ。
○しのぶ【忍ぶ】…①たえる。　②**秘密にする**。　③**がまんする**。
○やすし【易し】…①**容易である**。　②〜しがちである。
【安し】…①**安らかである**。　②安っぽい。
○しるべ【導・知る辺】…①**導き**。**案内すること**、また、その人。　②知り合い。
○ことごとし【事事し】…**大げさだ**。
○やをら…**そっと**。
○おどろく【驚く】…①**はっとして気づく**。　②**目が覚める**。　③びっくりする。
○にほひ【匂ひ】…①**色が美しく映えること**。　②香り。　③栄華。
○さればよ…**やっぱりだ**。思ったとおりだ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　模範解答

問一　堀河天皇に寵愛されたことなどご健在であった頃の思い出からすっかり覚める気持ちがするが

問二　鳥羽天皇が不思議そうに御覧になるので

問三　断定の助動詞「なり」の連体形「なる」の撥音便無表記と推定の助動詞「めり」の終止形

問四　自分が泣いてしまったことを、鳥羽天皇に不審がられたので、あくびのせいにしてとりつくろったが、鳥羽天皇は作者が泣いている原因が堀河天皇のことだと幼いながらもわかっており、そのことがかわいらしく沈み込んでいた気持ちも和らぐ気持ちがしたから。

問五　a

〈現代語訳〉

身に余るほどまで（堀河天皇が）ご寵愛くださっていたことが、自然と思い出されていると、（鳥羽天皇が）いらっしゃって、「私を抱いて、障子の絵を見せよ」とおっしゃるので、（堀河天皇との昔の思い出から）すっかり覚める気持ちがするが、天皇が朝食をとるお部屋の障子の絵を、見せてさしあげて回ると、天皇のご寝所の壁に、（堀河天皇が、生前）朝夕いつも見て覚えようとお思いになっていた楽譜を書いて、壁に貼りつけておきなさった笛の楽譜が（あり、その楽譜を）はがした痕跡が、壁に残っているのを見つけたのは、しみじみ悲しい。

笛の音の……＝（亡き堀河天皇が覚えようとなさった）笛の楽譜が貼りつけてあったのをはがした壁の痕跡を見ると、過ぎさってしまった事が夢のように思われる。

悲しくて（涙があふれて）袖を顔に押しあてるのを、（鳥羽天皇が）不思議そうに御覧になるので、お気づかせ申し上げるまいとして、さりげなく振る舞いながら、「あくびが出てしまって、このように目に涙が浮いたのです」と申し上げると、「全部わかっています」とおっしゃるので、いじらしくも恐れ多くも思い申し上げて、「どのようにわかっていらっしゃるのですか」と申し上げると、「ほ文字のり文字のこと〔＝堀河天皇〕を、思い出しているのであるようだ」とおっしゃるのは、堀河院〔＝堀河

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

天皇〕のことだとよく理解なさっていると思うにつけても、かわいらしくて、沈んでいる気持ちも和らぐ気持ちがして、思わずほほえむ。

〔**重要単語**〕

○かなし【愛し】…**かわいい**。**愛しい**。
【悲し・哀し】…①悲しい。心が痛む。②ひどい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第八講　模範解答

問一　過ぐしつれ　已然形
しつ　終止形

問二　光源氏が出家する前にしておく様々な身辺整理のこと。

問三　ア　様々な女性から光源氏に差し上げなさった手紙
イ　亡くなった人

問四　紫の上の筆跡を見るだけで涙がとめどなく流れるので、周囲の女房にあまりにも心が弱っていると思われそうなことが、源氏は恥ずかしくみっともなかったから。

問五　御手・墨つき

〔現代語訳〕

（源氏は）今年をこうして悲しみをこらえて過ごしてきたので、今は（もう出家しよう）と俗世を捨てなさる時が近くお思いになり覚悟なさるが、しみじみ感慨深いことがあれこれと尽きることがない。次第に出家前にしておく様々なことを、心の中で思い続けなさって、お仕えしている人々にも、身分の程度に応じて形見の品を与えなさったりして、おおげさにこれが最後だというふうには振舞いなさらないけれども、お側近く仕える人々は、（源氏が）出家のご本懐を遂げなさるご様子と拝見するにつれて、年が暮れていくのも心細く悲しいことこの上ない。

後に残すと見苦しいことになるはずの女性たちのお手紙なども、「破り捨てるのも惜しい」とお思いになったのであろうか、少しずつ残しなさっていた（手紙）を、何かのついでに見つけなさって、破らせなさったりなどするときに、以前、須磨・明石に蟄居していた頃、様々な女性から（源氏に）差し上げなさった手紙もある中で、紫の上からのご筆跡（の手紙）は、特に一つにして結んであったのだった。自らがそのようにしておかれたことであるが、遠い昔になってしまった時のことをお思いになるにつけても、たった今（書いた）ような墨の色の筆跡など、本当に千年先までの形見にでもきっとできそうなのを、（出家して

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しまうと）見ることもなくなってしまうのだろうよとお思いになると、（残しておく）甲斐もなくて、気心の知れた女房二三人ばかりに（命じて）、ご自分の前で破らせなさる。

本当に、これほど（心惹かれるわけ）ではない人のことでさえ、亡くなった人の筆跡と見るのは悲しいことなのに、まして（紫の上の筆跡を御覧になると）一段と目の前が暗くなり、どの文字とも見分けがつかないほど流れ落ちるお涙が紫の上の筆跡の上に流れるのを、女房たちもあまりに心が弱っていると拝見しそうなのが恥ずかしくみっともないので、（源氏は紫の上の手紙を傍らに）押しやりなさって、

死出の山……＝死出の山を越えてしまった人〔＝紫の上〕を慕う気持ちで、筆の跡を見ながらまだ心が乱れることだよ。

〔重要単語〕

○おどろおどろし…①**気味が悪い**。　②**大げさである**。

○うとし【疎し】…①**疎遠だ**。　②よく知らない。　③無関心だ。

○かきくらす【掻き暗す】…①雲が空一面を暗くする。　②**悲しみにくれる**。

○はしたなし【端なし】…①**中途半端だ**。　②**みっともない**。　③つれない。　④（雨などが）はげしい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講　模範解答

問一　匂宮には大切に思っていらっしゃる中の君がいらっしゃるので、婚儀に来ないのではないかと右大臣は不快に思うが、

問二　（２）なんとかして悩んでいることを顔色に出さないようにしようと何度も我慢しては、平静に装いなさることであるので

（３）今すぐに戻って参ろう。一人で月を御覧なさるな。あなたを残していく私は、心が上の空なのでとてもつらい。

問三　Aは、中の君を見捨てて、右大臣の娘との婚儀に行くのが気の毒だという気持ちで、Bは、右大臣側は匂宮が来るのを待っているのに、婚儀に行かないのも、右大臣家に対して気の毒だという気持ち。

問四　匂宮と右大臣の娘との婚儀は仕方のないことだけど、そう思うのに泣くほど悲しいのは、自分の心が弱いせいなので、人の心は情けないものであると、自分のことながら身にしみて感じている。

〈現代語訳〉

右大臣におかれては、六条院の東の御殿を美しく飾り立てて、この上もなく万事整えて（匂宮を）お待ち申し上げなさるのに、十六夜の月がだんだん空に上がるまで（宮はいらっしゃらず）じれったいので、「（宮はこの縁談を）たいして気乗りではないことなので、どうなることであろう」と不安にお思いになって、（右大臣が使者を）遣わし（て、匂宮の様子を探らせ）なさったところ、「この夕方に宮中から退出なさって、（匂宮は）二条院にいらっしゃるそうです」と使者が申し上げる。（匂宮には）大切に思っていらっしゃる人（＝中の君）がいらっしゃるから（婚儀には来ないのではないか）と（右大臣は）不快に思うが、今夜過ぎてしまうのも世間のもの笑いになるに違いないので、ご子息の頭中将に命じて（＝使者として）申し上げなさった。

大空の……＝大空の月さえ入ってきます私の家に、お待ちする宵が過ぎてもおいでにならないあなたなのですね。

宮は、「なまじっか今日が婚儀の日であると、中の君に知られないようにしよう。気の毒だ」とお思いになって、宮中にいらっ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しゃったのだが、（そちらから中の君に）お手紙を差し上げなさった、その（中の君からの）お返事はどのようであったのだろうか、やはりたいそうしみじみと（中の君を）愛しくお思いになったので、こっそりと（二条院へ）おいでになったのだった。（中の君の）可愛らしい様子を見捨てて出て行こうという気持ちもせず、気の毒なので、様々に（二人の将来のことなどを）約束し慰めて、一緒に月を眺めていらっしゃるところであった。中の君は、このところ何かにつけて思い悩むことが多いのだが、なんとかして（それを）顔色には出さないようにしようと何度も我慢しては、平静に装いなさることなので、とくに（匂宮の縁談を）気にもとめない様子で、おっとりとふるまっていらっしゃるそぶりが本当にかわいそうである。

中将が参上なさったのをお聞きになって、（匂宮は）そうは言ってもやはりあちらの方も気の毒なので、お出かけになろうとして、（中の君に）「今すぐに戻って参ろう。一人で月を見なさるな。（あなたを残して行く私は）心が上の空なのでとてもつらい」と申し上げ置きなさって、それでもやはりきまりが悪いので、人目につかない所を通って（中将に会うために）寝殿へいらっしゃる。その（匂宮の）御後ろ姿を（中の君が）見送るにつけ、あれこれと思わないけれど、ただ流れる涙で枕が浮いてしまいそうな気持ちがするので、「情けないものは人の心であるのだなあ」と自分のことながら身にしみて感じる。

〔重要単語〕

○こころもとなし【心許なし】…①**はっきりしない**。②**気がかりだ**。③**待ち遠しい**。
○あないす【案内す】…①**取次ぎを頼む**。②事情を明らかにする。
○こころぐるし【心苦し】…①**つらい**。②**心配である**。③**気の毒だ**。
○らうだげなり…**かわいらしい**。
○ねんず【念ず】…①**祈る**。②**我慢する**。
○つれなし…①**冷淡だ**。②**そしらぬ顔だ**。③平気だ。④なんの変化もない。
○こころうし【心憂し】…①**つらい**。情けない。②不愉快だ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　模範解答

問一（ａ）おやすみにならないので
（ｂ）ためらいなく
（ｃ）もっともである
（ｄ）いいかげんに
（ｅ）気がかりなので

問二　大将の両親の心の内が、大将が書いた出家を知らせる手紙を読み、並一通りではなく悲しみに沈んでいる状態。

問三　見苦しい子供がたくさんいてさえ、親の心は、子供全員が愛しく見捨てられないと思われるのに、まして大将のような立派な一人息子なら、大将の両親はなおさら大切に思われており、その息子が出家した悲しみを慰める方法がおありにならない

問四　ひどくこんなにまで大将が私たち両親の心を乱しなさっては、大将が極楽往生をたいそう願っていらっしゃるとかいう仏道の妨げにもならないことがあるだろうか、いや、なるにちがいない

問五（ア）一番大切にしているもの
（イ）大将

問六　死別

問七　何事をいとかくまで思ひて、さばかりあたらしかりつるさまをば、今はやつしや果て給ひぬらむ。（四十四字）

問八（ア）両親が、息子の出家にたいそう嘆いて薬湯さえ飲まずにいるので、そのまま衰弱して亡くなるのではということ。
（イ）大将の出家に悲しみ沈んでいる両親のそばにいて慰めるため。

〔現代語訳〕

京では、殿と母上〔＝大将の両親〕がなんとなく胸騒ぎがするようで、安心しておやすみにならないので、夢などもまったく

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

わけがわからず何となく不安な感じなので、夜が明けきらないうちに三条殿〔＝大将の邸〕をお訪ね申し上げなさると、「昨日そちらに（大将が）いらっしゃった後は、まだお帰りになっていない」ということを大弐の乳母が申し上げたところ、「どういう事だろうか」と胸騒ぎがされて、今度は内裏をお訪ね申し上げなさると、「（大将は）昨夜退出なさいました」などと申し上げるので、たいそう気持ちが落ち着かないように思いなさるうちに、大弐の乳母が御出居の方を見ると、（出家を意味する和歌が書かれた）不審なむだ書きが、（仏道に心を寄せているのは）いつものこととはいいながらひどく不吉で、そばにお手紙が二通あるので、宛名の通りに（大将の両親と中宮に）それぞれ送って差し上げる。殿と母上は、手紙とお聞きになって、心も落ち着かれて急いで開けて御覧になると、たいそう丁寧に書き付けられた事などを御覧になると、（大将の両親の）御心の内（の悲しみ）は並一通りではない。母上は何もおっしゃらず、着物を頭からかぶって、そのまま横になってしまわれた後は、身じろぎもなさらず、まるで死んだ人のようにしていらっしゃった。見苦しい子供が大勢いる場合でさえ親の心はどの子もみな愛おしく見捨てがたく思われるのに、（まして大将のような立派な一人息子を出家で失った両親の心は）慰める方法がおありにならない。院や帝をおはじめ申し上げて、世の中の人にとって、才能・姿・容貌のどれをとっても、またとないすばらしい光とばかり褒め称えられていらっしゃった有様を、行方知らずにしてしまわれたのは、本当に定まった寿命も今すぐどうなることかとお見受けされる。殿は、「今はそうは言ってもやはり余命少なくなった私たちを見捨てては、慈悲深い仏のお迎えまでもどうしてためらいなく（浄土に）参られようか。（大将は）ひどくこんなにまで（私たち両親の）心を乱しなさっては、（大将が）たいそう（極楽往生を）願っていらっしゃるとかいう仏道の妨げにならないはずがあろうか、いや、なるにちがいない。これほどまで（我が子に）見捨てられた身は恥ずかしくもつらくもあるので、何とかしてこのように思い悩まないようにしよう」と考えを改めなさるけれども、いつもよりも思い乱れながらお出かけになった（大将の）面影を思い出されると、早くも体裁が悪いほどの恋しさをこらえることができなくて、お声も惜しみなされず（お泣きになり）、「何をたいそうこんなにまで思い詰めて、あれほど立派だった姿を、今は僧の姿に変えてしまわれたのだろうか。掌中の玉よりももっと気がかりで、朝夕の出入りにつけても穏やかな心地もなく、ただもう大切にといつも思っていたのに、死別でさえ忘れることも決してないのに、行方もわからずに（私たちを）悲しませなさるとは、やはりつらい」とお思いになるので、（大将が）「返す返すお嘆きなさいますな」とだけお書きになっている文字の様子や、筆跡など、（大将は）気も確かではない心の中でも、もう本当にこれが最後だと思われたからだろうか、言い

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ようがないほど優れたところがあって美しいけれども、「このように世に長くいられないために、すべてこのように優れていらっしゃったのであろうか」と、何かにつけて地団駄とかを踏んでしまいそうに思い乱れていらっしゃるご様子はもっともである。

中宮もこの置き手紙を御覧になると、胸が詰まって悲しく思いなさることとこの上ない。「（昨日大将が）いつもより特に思い乱れていらっしゃった様子は、本当に変だったけれども、ただいつものことことばかり思いながら、しっかりとお話し申し上げることなどもなく終わってしまったことよ」と頼りにする人もいなくなり何となく心細いとまでお思いになる。同じ姉弟といいながら、この上なく思い合っていらっしゃった仲であるので、本当にどうしていいかげんにお思いになるはずがあろうか。姫君はこのようなことをお聞きになると、母上が（亡くなった）時にはさすがに幼くて、しっかり分別なさることもなかったけれども、今度の場合はたいそうしみじみと、自分の将来も頼りなく思われて、しくしくと泣きなさるのを、中将の乳母は拝見してもたいそう悲しい。帝もこのようにお聞きになって、「あれほどこの世でまたとなく優れていた様子を、何が原因でそれほどまでに世を捨ててしまわれたのだろうか」と、悲しくお思いになって、涙をお拭いになる。

殿や母上はひどく思い詰められて、ちょっとした御薬湯などさえ目をお留めにならないで、日数が経ってゆくので、今さら仕方のないこと（＝大将の出家）はいうまでもなく、両親のことまでもたいそう恐ろしく危ぶまれて、中宮も、一緒にそばにいてお慰め申し上げたいとお思いになって、（帝に実家に退出する）お暇をお願い申し上げなさるけれども、（中宮の）ご様子がいつもよりも気がかりなので、（帝が）お許し申し上げなさらないから、（中宮が）本当に残念だと思われた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔**重要単語**〕

○うちとく【打ち解く】…①溶ける。　②**安心する**。　③**男女が慣れ親しむ**。　④油断する。　⑤ひもの結び目などを解く。

○まがまがし【禍禍し】…①**縁起が悪い**。　②いまいましい。

○なのめなり【斜めなり】…①**ありふれたさま**。　②いいかげんなさま。　③（中世以降）格別だ。

○あまた…**たくさん**。

○かたち【形・容・貌】…①**姿**。　②**容貌**。　③美人。　④ようす。

○またなし【又無し】…**またとない**。

○ののしる【罵る】…①**大騒ぎをする**。　②評判が立つ。　③口やかましくいう。

○さうなし【左右無し】…①どうとも決まらない。　②**ためらわない**。

○まだし【未だし】…①**まだ早い**。　②**未熟である**。

○あたらし【惜し】…**惜しい**。もったいない。

○やつす【俏す】…①**目立たないように姿を変える**。　②**出家する**。

○ことわりなり【理なり】…**当然である**。もっともである。

○はかばかし【果果し】…①**すらすらとはかどる**。　②**はっきりしている**。　③**たのもしい**。

○ありがたし【在り難し】…①**めったにない**。　②すぐれている。　③**生きながらえにくい**。　④尊い。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十一講　模範解答

問一（a）目的のない所へはいらっしゃるはずがないのに
（b）たいしたこともない人の家であるような所でさえ
（c）ご馳走をして召し上がっていただける食べ物がないとのことです

問二　雪を踏み侍らじ（七字）

問三　どうして、このような山里で、突然の来訪者がございますような際の準備がないことがございましょうか、いや、準備なしではいられません

問四　伏見では、評判の歌詠みが集まって、和歌の会を催し、たくさんの優雅な和歌が詠まれ、人々に興味を持たれたり、突然の来訪者にも対応できる準備をしているから。

問五　地名の「伏見」に、宿泊するという意味の「伏してみる」が掛けられている。都の人が、日が暮れたので帰ってしまう。今からは、「伏してみる」という伏見の里の名をあてにしないようにしよう。

〈現代語訳〉

大殿〔＝藤原師実〕が伏見へいらっしゃったときも、目的のない所〔＝当てもない所〕へはいらっしゃるはずがないのに、雪が降った早朝、「俊綱がとても伏見を自慢するので、突然だが行ってみよう」とおっしゃって、播磨守師信という人だけをお供として、突然お出かけになったところ、思いも寄らないことで、門を叩いたけれど、いつまでも（門を）開けなかったので、人々が「どうしたのか」と思った。これほどの雪の朝に、たいしたこともない人の家であるような所でさえ、このような時節などは、そういう〔＝来訪者がある場合の〕心遣いがあるべきなのに、まして大殿がおいでになったのに（なかなか門を開けないので）、あれやこれや心外に思っていると（ようやく門を開けたので）、開けた者に、開けるのが遅かったわけを、お尋ねになったところ、「雪を踏まないようにしましょうと思いまして、山をまわっ（て来）たのです」と申し上げたので、もともと（門を）開けて待ち受けていたり、また何はさておいても急いで開けたりするような場合よりも、心配りが面白いということを、人々が

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

言ったとかいうことである。

修理大夫（＝橘俊綱）が慌てて出て来て、（大殿が）雪を御覧になってお話などなさるうちに、師信が「こうして（大殿が）おいでになったのだから、さあ、それにふさわしいおもてなしなどをいたしなさい」と催促したので、俊綱が「すぐに調理をする人が参るでしょう」と申し上げたところ、「人にも知られないでおいでになったので、調理をする人が参ることはないでしょう。日も次第に高く昇って、どうしておもてなしがなくてよいことがありましょうか」と言ったので、大殿は笑いなさって、ただ「催促しろ」などとおっしゃっていたときに、家司であるあきまさといって、光俊・有重などという学生の親であった男が、それとないそぶりをいたしたところ、修理大夫が席を立って出て、戻って参って、「ご馳走をして召し上がっていただける食べ物がないとのことです。御台などの新しいものも、このように御覧になっている築山の向こうの倉にしまい込んでありますので、不都合にも取り出すことができません。今出ていますのは、みな人が使った（ものです）」ということを申し上げたところ、（大殿は）「どのような差し支えがあるだろうか、いや、ない。すぐに取り出しなさい」とおっしゃったので、「それでは」と言って立って出て行き、取り出されたが、色とりどりの狩装束を着た伏見侍が十人、様々な色の衵の上に、言いようもなくすばらしく染めませてある帷子で、括りや、かけとじなどをしてあるのを着た雑仕十人を引き連れて、倉の鍵を持った男が、先頭に立って行くときには、雪に映えて、わざわざ前もって準備していたようであった。先に踏みつけた足跡を、後に続いている男女が、同じ足跡を踏んで行った。帰りには、御台、高坏、白銀の銚子などを、一つずつ捧げて、鍵を持った男は、今度は一番後に立って帰って来た。

こうしているうちに、上達部、殿上人、蔵人所の家司、職事、御随身などが、それぞれに参上して込み合って来たので、この里やあの里の、あちらこちらに何とも言いようがないほどすばらしいご馳走などが（たくさんあり）、まぶしいほどに豪華であった。師信が「どうしてこんなに急に用意できたのですか。前もって（殿がいらっしゃる）夢などを見たのですか」などと冗談を申し上げると、俊綱の君は「どうして、このような山里で、このような突然の来訪者がございますような際の準備がないことがございましょうか、いや、準備なしではいられません」などと申し上げなさった。

伏見では、その当時の歌人たちを集めて、和歌の会が催されないときはなかった。伏見の歌会（で詠まれた歌）として、数多く（秀歌が）残っているとかいう。「音羽の山が今朝は霞んでいることだ」などと詠まれた歌は、とても優美ですよ。このよう

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に面白がられるあまりに、（俊綱も伏見を）ご自慢申し上げなさったのであろう。四条宮の女房が、大勢伏見で楽しんで、日が暮れないうちに帰りになさったので、修理大夫が、

都人……＝都の人は日が暮れたので帰ってしまう。今からは「伏してみる」という伏見の里の名をあてにしないようにしよう。

とお詠みになった。

〔重要単語〕

○すずろなり【漫ろなり】…①**なんとなく～だ**。②**むやみやたらである**。③**思いがけない様子**。④**用のない様**。

○つとめて…①**早朝**。②**翌朝**。

○にはかなり【俄なり】…**急**なさま。

○あした【朝】…①**朝**。②翌朝。

○まうけ【設け・儲け】…①**準備**。**用意**。②**ごちそうの用意**。③食事。

○あるじす【饗す】…**主人として人をもてなす**。饗応する。

○びんなし【便無し】…①**不都合だ**。②**よくない**。

○はばかり【憚り】…①**遠慮**。②支障。

○わざと…①**わざわざ**。②正式に。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　模範解答

問一　ラ行四段活用動詞「入る」の未然形「入ら」／尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」／尊敬の補助動詞ハ行四段活用「たまふ」の終止形「たまふ」

問二　弓の名手であり、素晴らしい武士である為朝が味方に加われば、必ず合戦に勝てるであろうと左大臣は確信しているから。

問三　夜討ちにして、内裏に押し寄せて三方から火を放ち、残る一方から攻めて逃げ場を失くし、天皇を他の所へ移動させる時に御輿に矢を放ち、輿をかついでいた男が逃げ出した時に、天皇をこの御所へ連れてくる。（九十五字）

問四　私の実の兄でございます義朝だけが、激しく防戦するでしょう

問五　負けそうになった時、きっと後白河天皇を他の所へ移すでしょう

問六　作者は為朝がとてつもなく強い武士であることを読者に伝える意図をもち、上皇の前で、たくさんの敵を一人で斬り倒し、天皇にも矢を放つという言葉を遠慮もせずに堂々と話す様子や乱暴者でもある態度で表現している。

〈現代語訳〉

崇徳上皇が、ご座所の御簾を引き分けて御覧になる。上皇のご機嫌はたいそう良さそうでいらっしゃる。左大臣殿が、大床に伺候していらっしゃったが、遠くに（為朝を）見つけて、微笑んで、「為朝は、すでに参上しております。（為朝は）本当にすばらしい武者でございます。一人当千とはまさにこの者を（そのように）申し上げるのでしょう」とおっしゃって、これ以上ないほどご感動になっている。（左大臣殿が）「為朝よ、合戦の戦略を、順序立てて申し上げよ」とお命じになる。（為朝が）畏まって申し上げたことは、「私為朝は、幼少の頃から九州に住んでおりまして、合戦を経験したことが、すでに二十回を超え、三十回に及ぶのである。ある時は敵に勝ち、ある時は敵に敗れた。そこで、合戦に勝った前例（の勝因）を分析するにつけ、（今回は）夜討ちに及ばない。夜が明ける前に、内裏高松殿に押し寄せて、三方に火を掛け、（残り）一方から攻めると、火を逃れる者は矢を逃れられず、矢を逃れる者は火を逃れることができません。（私の）実の兄でございます義朝だけが、激しく防戦する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

でしょう。その義朝を、私為朝が、（甲の）真ん中を射て必ず射落とそう。その他の雑兵たちを、太刀を抜いて（軍勢の）中央に駆け入り、遠くにいるような者に近づいて、片手打ちにして斬っては落とし斬り捨てて、薙ぎ倒し、払い落とし、近づく者を引っつかんで、上から下に斬り落とし、斬り捨てて、あるいは首を捻じ切り、腕を引き抜き、引き割きなどして、（戦場を）馳せ回るならば、疫病神はいざ知らず、いったい誰が（私と）まともに戦うことができるか、いや、できない。まして、清盛などの（勢いのない）へろへろ矢は、物の数ではございません。その時、きっと、天皇を他の所へ移すでしょう。（その時に）御輿に矢を放ち申し上げましょう。これは、私為朝が放つ矢ではないでしょう。天照大神や正八幡宮が放ちなさる御矢でございましょう。御輿をかついで運ぶ男たちは、矢を恐れて御輿を棄て申し上げ、きっと逃げ散るでしょう。その時、天皇をこの御所へお連れ申し上げることは、時間をかけてはならない」と、言葉を放ち、遠慮もなく申し上げた。

〔重要単語〕

○ゆゆし…①**おそれ多く慎まれる**。　②忌まわしい。**不吉だ**。　③たいそうである。　④**すばらしい**。　⑤ひどい。
　⑥気味が悪い。　⑦勇敢だ。

○みゆき　【行幸】…**天皇のお出かけ**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答解説

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第一講　解答解説

〈解説〉

①「(憂き) **世を背く**」は、「**出家する**」ということ。本設問は「そむくべきうき世」となっているが、同じこと。よって、正解はウ。

②「**未然形＋ばや〈文末〉**」は、**自己願望の終助詞**「～たい」。よって、正解はイ。

③「かしづく」は、重要単語で「大切に育てる・大切に世話をする」の意味。その意味がとれるのはオのみ。よって、正解はオ。

④「～に」がないので、受身ではない。下に打消の語がないので、可能でもない。上が心情動詞、知覚動詞ではないため、自発も違う。したがって、尊敬のはず。訳して確認してもおかしくない。よって、正解はエ。

〈解答〉

①　ウ　　②　イ　　③　オ　　④　エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二講　解答解説

〔解説〕

①「なり」の上が「聞こゆ」。「聞こゆ」はヤ行下二段活用の**終止形**なので、**伝聞推定**の「なり」。よって、正解はカ。

②「なり」の上が「**体言**」なので、**断定**か**存在**。設問文は「中**にある**物」なので、**存在**の「なり」。選択肢の中で、「なり」の上が「**場所・方角**」になっているのは、イ「西」。よって、正解はイ。

③「らうがはし」は重要単語で、「乱雑である・騒々しい・乱暴だ」の意味。よって、正解はア。

④『万葉代匠記』は契沖の著。よって、正解はエ。

〔解答〕

①　カ　　②　イ　　③　ア　　④　エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第三講　解答解説

〔解説〕

①「**上下**」は問題になっていれば、「**身分の高い者と低い者**」という意味になる場合が多い。その意味がとれるのはエ。他の選択肢の解釈も不可。よって、正解はエ。

②「**気色悪し**」は、重要単語で「**機嫌が悪い**」の意味。よって、正解はア。

③和歌の総合問題。Ａは、**キーワードの体言**から**想像**できるもの＝**縁語**。Ｂは、同音に意味が複数ある技巧＝掛詞。Ｃは、和歌の一部分を**セリフ**として用いること＝**引歌**（「本歌取り」は、「**ある和歌を元**にして**新しい和歌を作ること**」なので、Ｃの解答にはならない）。「縁語・引歌」は講義中に触れていないので、Ｂのみが「復習問題」となるが、せっかくなので入試問題そのままで出題しました。知らなかった人はこれを機会に覚えておこう。

〔解答〕

①　エ　　②　ア　　③　Ａ　イ　　Ｂ　ア　　Ｃ　エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講　解答解説

〔解説〕

① 「なかなか」は、重要単語で「かえって」の意味。よって、正解はイ。

② 「あながちなり」は、重要単語で「無理矢理だ・一途だ」の意味。よって、正解はエ。

③ 「しどけなし」は、重要単語で「だらしがない」の意味。よって、正解はア。

④ 「**ましか**ば～**まし**」・「**ませ**ば～**まし**」・「せば～**まし**」・「未然形＋ば（＝仮定）～**まし**」の「**まし**」は**反実仮想**。「**ずは**」は「～ないならば」と訳す**仮定**条件。よって、正解はエ。

⑤ 『新古今和歌集』は鎌倉時代に成立。よって、正解はア。

〔解答〕

① イ　② エ　③ ア　④ エ　⑤ ア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第五講　解答解説

〔解説〕

①「いとほし」は、重要単語で「気の毒だ」の意味。よって、正解はア。

②係助詞「か」は、「疑問」か「反語」。選択肢に「疑問」がないので「反語」だとわかるが、「何事」と**疑問と一緒に使用しているので、**万一「疑問」があっても**「反語」から考えるのがポイント。**正解はイ。

③「やがて」は、重要単語で「すぐに・そのまま」の意味。よって、正解はア。

④上が**a段**（＝四段活用動詞の未然形）なので、**助動詞「る」**と判明。「**～に**」と書いてあるので「**受身**」の意味である。よって、正解はア。

〔解答〕

①ア　②イ　③ア　④ア

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第六講　解答解説

〔解説〕

① 「まめやかなり」は、重要単語で「誠実だ・真面目だ」の意味。その解釈ができているものは、イ「真剣」のみ。よって、正解はイ。

② 「ことごとし」は、重要単語で「大げさだ」の意味。よって、正解はイ。

③ 「やをら」は、重要単語で「そっと」の意味。よって、正解はイ。

④ 「**いつしか**」は「いつ」と訳す場合もあるが、**問題になっていれば、「早くも」や「早く」から考える**のがコツ。もちろん文脈判断は必要であるが、本設問でも直前が「とく（＝早く）夜が明けよ」と待ち明かして「いつしか起き」なので「早くから」でおかしくない。よって、正解はエ。

⑤ 「おどろく」は、重要単語で「はっと気づく・目が覚める」の意味。現代語と同じ「びっくりする」という意味もないわけではないが、やはり問題になっていれば、**現代語とは違う意味から考える**のがコツ。さらに、文脈判断でも直前が「夢に～見た」とあり、「おどろいた」から「暁がたになっていた」ということから、「目が覚める」でおかしくない。よって、正解はウ。

〔解答〕

① イ　② イ　③ イ　④ エ　⑤ ウ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講　解答解説

〔解説〕

①　「なめり」の「な」は、**断定**の助動詞「なり」の連体形の撥音便無表記である。よって、正解はカ。

②　『讃岐典侍日記』の主語把握方法をもとに考えると、セリフの直後が「～おほせらるる」と**二重尊敬のみ**なので、「**鳥羽天皇**」と考えられる。さらに「**いはけなき**（子供っぽい）御けはひ」からもおかしくない。よって、正解はウ。

③　**問1**　Aは「おほせられし」なので、**二重尊敬**＋**過去**の助動詞。よって、**堀河天皇**と考えられる。Bは、**尊敬語がない**ため（「思ひ出でらる」の「らる」は自発）、**作者**。Cは「大殿ごもり」で**二重尊敬相当の敬語**。さらに、「**いはけなげ**（＝子供っぽい）」からも**鳥羽天皇**。

問2　「ひと所」が「見えさせたまはぬ」と二重尊敬のみだが、訳してみると「お見えにならない」となり、その直後が「と思ふのが、悲しい」なので「（亡くなったので）堀河天皇のお姿がもうここには見えないと思うのが悲しい」とつながるので、「ひと所」は「堀河天皇」と考えられる。

④　『讃岐典侍日記』は平安時代の作品。『**十六夜日記**』は**鎌倉**時代に成立。よって、正解はウ。

⑤　『更級日記』の作者は菅原孝標女。藤原道綱母の姪である。『源氏物語』の作者は紫式部。

⑥　日記の成立順は、**土佐→蜻蛉→和泉式部→紫式部→更級→讃岐典侍→十六夜**。よって、正解はイ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔解答〕

①　カ　②　ウ　③　**問1**　Ａ　ア　Ｂ　ウ　Ｃ　イ　**問2**　ア

④　ウ　⑤　ａ　オ　ｂ　カ　ｃ　イ　⑥　イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第八講　解答解説

〔解説〕

① 「**女手**」は「**仮名**」のこと。「**男手**」は「**漢字**」。よって、正解はイ。

② 「おどろおどろし」は、重要単語で「気味が悪い・おおげさだ（ものものしい）」の意味。よって、正解はイ。

③ 「はしたなし」は、重要単語で「中途半端だ・みっともない」の意味。よって、正解はエ。

④ 「うとし」は、重要単語で「疎遠だ」の意味。よって、正解はイ。

〔解答〕

①　イ　②　イ　③　エ　④　イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第九講　解答解説

〔**解説**〕

①　「心もとなし」は、重要単語で「はっきりしない・気がかりだ・じれったい」の意味。よって、正解はエ。

②　「**な〜そ**」は「**〜してくれるな**」と訳す禁止の呼応の副詞。「たまひ」は尊敬の補助動詞。両方きちんと訳せているのはウのみ。よって、正解はウ。

③　「**いかで**」が「**にしがな**〔＝**自己願望**の終助詞〕」と一緒に用いられているので、「**なんとかして・どうにかして**」という訳になる。「見聞か**ず**」なので「見たくないし、聞きたくない」のである。よって、正解はエ。

④　「**袖も絞る**」は、「**涙で**袖が濡れる」＝「**泣く**」という意味になる。よって、正解はイ。ちなみに「**墨染**」は「**僧衣**」の意味。「入道」は「僧」。全てきちんと解釈できているものはイ。

⑤　「**袂が乾かない**」＝「**涙で**袖が濡れている」＝「**泣く**」ということ。よって、正解はオ。

〔**解答**〕

①　エ　②　ウ　③　エ　④　イ　⑤　オ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十講　解答解説

〔解説〕

①　「左右なし」は、重要単語で「ためらわない」の意味。よって、正解はエ。

②　「ことわりなり」は、重要単語で「当然だ・もっともだ」の意味。よって、正解はイ。

③　「やつす」は、重要単語で「目立たないように姿を変える・出家する」の意味。この場合、傍線部の後ろに、「行ふ」という単語もあり、こちらも「仏道修行をする」という重要単語。したがって、「出家する（＝法師になる）」の意味でとればよいことがわかり、よって、正解はイ。

④　「**やは**」の「や」は「**反語**」から考えるのがポイント。文脈判断が必要であるが、この文も反語で訳してみてもおかしくないことから反語確定。よって、正解はオ。

⑤　「**まして**」**の後ろの省略部分**は「**だに**」**の直前の内容と反対の内容**であると考えられる。「だに」の直前が「かたほ」について書かれているので、その反対語の「まほ」ならばなおさら、ということ。よって、この解釈がきちんとできているオが正解。ウとエは元が「かたほ」であるので、反対の内容ではない。元が「まほ」であるオが反対の内容である。文脈判断をしてもオしか不可である。

〔解答〕

①　エ　②　イ　③　イ　④　オ　⑤　オ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十一講　解答解説

〔解説〕

① 「すずろなり」は、重要単語で「なんとなく～だ・むやみやたらである、思いがけない様子、用のない様」の意味。原義は「意に反して、または、意に関係なく（無意味に）ある方向にひたすら進んでいくさま」である。よって、正解はウ。

② 「わざと」は、重要単語で「わざわざ」の意味。よって、正解はウ。ちなみに、「やつす」も重要単語。「（高貴な姿が目立たないように）みすぼらしい様をする」という意味があり、「書きやつす」＝「下手に（書いて）見せる」という解釈も正しい。

③ 「はばかり」は、重要単語で「遠慮・支障」の意味。「かみ」は、漢字で書くと「神」と「上」があり、「上」なら「天皇」という意味がある重要単語（「うへ」とも読む）。文脈判断で「かみ」は「上」とわかる。「はばかりなし」の解釈も「差し支えない」とおかしくなく、正解はウ。

④ 「あした」は、重要単語で「朝・翌朝」という意味。よって、正解はエ。

〔解答〕

①　ウ　②　ウ　③　ウ　④　エ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十二講　解答解説

〔**解説**〕

① 「せ」の上が未然形で語尾がａ段なので、**助動詞「す」**。**真下**に「たまひ」と**尊敬語がある**ので、**上**をざっと確認すると使役の対象の「～に」がない。さらに、接続助詞「て」で続いていき、直後のセリフの』の下が「のたまふ」と尊敬語になっており、「せ」を尊敬で訳してもおかしくない。よって、正解はウ。

② 「に」の**上**が**体言**で、**下**に「**あり**」があることから、「**断定**」の「に」。よって、正解はウ。「あり」が敬語になっていても気づけるように。

③ 「**～に**（は）**しかず**」は「**～に及ばない**、**～のほうが良い**」の意味。よって、その解釈ができているエが正解。

④ 「ゆゆし」は**多義語**なので、傍線部の**前後**をきちんと確認すること。本文に「あやしくわびしげなる」とマイナスの言葉が前にあるので、この「ゆゆし」もマイナスの意味。「ゆゆし」のマイナスの意味は「不吉だ・気味が悪い」など。よって、正解はイ。

〔**解答**〕

①　ウ　②　ウ　③　エ　④　イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。